英氏一蝶　後集

12
881
13

須磨

巻乃名　細　此巻ハ源氏廿五歳の三月より次年
の三月までの事あり　廿四歳の巻ハ殊より廿五歳の春を
此事物語よりんとも此巻ハ須磨の事を名とするを其
ノ巻巻乃末ハ弘徽殿の悪意よりして遠流あるへき
定めなとも有けるをやさやうハ須磨をおほしてこう
須磨ハ行平の配所なれハ物語乃此巻ハ妙也

世中いとわつらはしくはしたなき事のみまされは
細　世間物むつかしき也　系　源氏左遷ハなけれとも
其ハ物語の面にハみえねとも内々ハ流罪の沙汰ある
ましき様に思ふ国なとへ流されむ行平の乞ひなるを也
行平てこの郡をつかはされしに配所に
せめて其よりも須磨ハ今の世に

打聞ちりぬ〔細〕いまう蟄居して有ぬへくと云説也
〔宗〕是ハ流の沙汰ありとも打角身をたてさきを急ぎて行て
あらんよりハ我とのかんもされとも須磨ハ都をはなるる事と国な
と人情うすく世の中あやうき思ひの絡あり給はするなるへし
有定行也
かの須磨ハむかしこそ人のすみかなともありけれ今ハいと
里はなれ心すこくて海士の家たにまれになと聞給へと
人しけくひたゝけたらん住居ハいと本意なく　〔宗〕此物語ハ須磨に三百餘年以前なり
昔古の事を家にもとつきしさ所と見へしあり
源氏須磨に隠居ありし事ハ行平中納言を
模して古と周公旦の二叔の讒によりて東征せし
事を擬要としもて菅丞相の宮内大宰府の左
宰府に左遷せし事　野相公の隠岐の国へ流されし事を

なとそ有る又行平ハ播广国に庵居せしかひそう
に京人のありしかによりて宰府へ行しふつきさ
ま給へり彼是を見合て物語に作るよしもり排
其に文王の子武王の弟と源氏の御桐壺の御子に周公旦
をかの御弟となるへし讒謗有るへし　花同　細　行
平の事もしるへし用られしなり又周公旦管叔
蔡叔乃讒言によりて東征せしことを見合て又菅丞
相の讒言によりて左遷ありし事をとり入ひとつと
して作れる也又大不縁して一身を有るの本を
生ひたちより此事を行平のとふして行けるを
故を行平ハこれを籠居したる也今源氏もかるる
蟄居有へしとや
自らつまとも有ものはいと浪へなるへし　宗　叩

抑さてこの御ひまつりこそ京とよろこびはしめると
云ふ平家も元心も治の内の摂政殿の中の君とも　河内
去とて都ととなりしんとも万さと御所におはしまさむと
人のうつくる御屋形もみるるよろこびの内もかうさはゆくを
是よひ後も夜からふりさきとなりとさ海くあり
細　兼さん都まりれ福も不と古きよれ福し　宋さい
ひさくあさ一家なると人心んとも古き心ともさ丸とのんも
う丸扨とさひるて住る世もい海乃とさうれさるうんと
をお申もれハいとと主てうれるすお申のる中すも姫君の
何ねとくまさこんへく　宋まて浮世といの様さて紀へとと
ものこさくれ是様うく丸とのん定すよへし
とひおけさ絵ろ治されんさるしうあさまさうくとゆさ
あくろきてもまうこおひ乃ん書てとようなうもて也お申さんよ

てこそ丸あすと一二日乃ほとより家くたほりくく
為ほ六おいの丸ささのまか申しを女房もん内をうのとたひ
紀つるとうくとさら丸ほとくうきるとお後くちくほをかう
もを　宋　宋の名遷乃事を御意次第とも
おつとうきのたゑてくくのとゆうむとも治くめるる丸世あり
宋　右近ハ花んの三ヶ年も元暦ハ六年とひつり源氏ハ平家と
都とさるとうさ絵へ丸海京内ともとある丸とのんも
古　我朝ハゆく急もさて後さてく後おうさとうきまとと年を
やうそてかる人きうやてにむやとさしくお申し紀へハ君ひ
二あまきるとまにともやと打申しくるわりとおれとはる人やと
うん海つて丸おしる筋より申された上手まし流人ともあう
らんまかく底く丸治さ後ようくひきをあし紀へてんとい
とつきるくあかきもの中まる抑とひのつきるる人さるとなま

とおほしくなりぬ 宗 源氏の心にハ流罪にあらさる迄ハ清井れ
別まてやと思給也 細同 主爲乃あまたある中ニ須磨の事ハく
存し道まて書ひ付てとかのこゝろに京れ由ハ陳
なきとてよめる也そ
古 うきをあれ給ひしとそ思ひしとハかきりれ出とそなかう
女君ハうらみ給ふことをよそれ出よりにおもひもお
ももまてうしろにまにお須ろと 宗 須磨の世乃名すも
よろ思はるゝ也
うの花ちる里ハまてさりまてまうまそれ清く
家事をいかゝ有さ給ふとこれ清くにくれてまうし給ハ
お須しおかけまゝあらぬを見とゝまりてまいりと行
うつゝも須のかたまり 細 是を一ほちに源氏ゆう給ふ也
かよひ給ひし人ハ思ふと見え給ふそお須ろも

家 宗 源氏須のうに見え給ふへきともなと書きて也
入道の宮なることも 細 藤壺乃ありやまたに掛て入道と云也
男女よろひく侍従の道に入るとて入道と云ハ其道也 同宗
物の事にや又なくとる事なきと何の法にもめ清くまし
なれと思ひけれは法と云ひはゝにあり 宗 藤壺乃御方
のみたとる事おほさんかたなんめり
むかしかやうにあひお須しかれとも見ん給ハまして
うらみ思ひ給へりしをさえまてにまさりて
家人の心ちにてあるかれとはやくと思ひ出給ふ 宗 源氏の御
しへ藤壺に心をよせ給へ時よりにはした鏡（子ニゴロ）あめり
思しつゝみんと思ふ夢ゆるしもなくてとかや
鏡さるもとりくにてた慰は笑うと也
三月廿日あまりの程になん都をはなれ給ひける人にいまとしも

色々しき御有さまいとかうつくしうまつりて侍れはあるらう
ものゝ七八人ちかきはかりにて　栄　あはれに思されける事也
其時おとゝの御指南也廿日あまりひとゝせ如くし　花
西宮左大臣安和弐年三月廿六日左遷太宰府云々
弄　細同之
いとゝはかなくてたゝ給ける人さへさらに清きをもちうち
思給しみもほの見えしもの心ありつゝも給へるもかんなれ
ともなひ人々かなしうと　細　今積なと無くとも奥まで出立給ふ
いふなるや此御世流れまさかまさなきおりは心とは侍へし
かれかの心地のまゝさしもちかくしうもこそとかくまうれ
あやしき二三日かく　栄　例の式アリ其時の上方へまゐらやうあり
またうちうしさにいとへとさしと也一義云紫式部西宮左
府乃思ひ人まても行すゑ源氏まちうにして左遷をも候

あるかたへ従此物語左は左府の左遷の年とも
おろに隔りたり不必当る也　細　某事の心也
よそにかくまてお侍つ度ゝにかならず給へり　栄　世をも思也従来
乃涌而抄にかかりこそ是可哉也　弄　細同
あしろ車はちかきつまて原子なく女車にやつしてかくろへ
の給もいと哀なる事とのこみ也　栄　それらなる車如くし
河　栄花物語に云おほやけの御しろ車にてとのゝ御かたくろ給ひ
此時大臣左遷乃時のこと也
清らなるいとさしひしきにうち隔てある心ちしてわかれ給ふの清め
のとゝもむかしたかくひとへの中にさらでもちかくぬかつきさうらふ
色々なる御給へるをとめつゝしつるも世中てまかのありつとひ
て乃んなるにつきてうちにたこの物あはくらぬかうさんしさん世
乃はしもよろこばしき事をまてて涙まことにれさるかと　清らなる　細　葵

上の御うちも此 宋 葵上を源氏おほしまさし給也
わか君ハいとうつくしうておはしまさすとも
細 夕霧也 抄 此夕霧ハ宋葉なるへし
ねさしきは源氏の君をそむきてひさしく給へる
御えしきなと
思ひつゝもおもひやりにこそおはしまし給
ありそめをとなり 宋 源氏の御後見と
つるくにこそ世給へらん御とおもひと給ふ故 若此摂政を
まかりきて世の中をまかりとむへき事のひとりも給
まう御代をみもはかりまつりしを 細 大臣源の事
見せしまうて出仕る先成へし
位をとゝめてたてまつりて給はりてくしき後ふき
河 致仕ハ辞官不辞位也階位をとゝむる也 罪科の時の事

也ここ 細 官をも辞してこもりゐ給へる也
きしのつくらんと摂政をもゆるしたまへることを今も世
中をしろしめすへきにも侍らすと 花 蟄居せる人の外へ出るを
つとめてといふことなし のもとにこもりゐ給ふ也 たゝ致仕の表を
奉て隠居のしかたハ私ならす 又おもくしたまへり
まん物のきこえとそ承し也 河海の義おもしろきか
又や 河 腰を屈するは官仕の礼也今とりあつかふと河
ある人 休退のんや 細 河海引退体をあけたるは破之
後の河海説を可然也
いちきやうことのいてとおもへるにかきりなきとも給
かまつかまて 宋 家ふとくハよろしきなりも也 家強 細 厳密なる也
命なかきハはち多し思ひつゝ世のまゝも給の助
河 寿則多辱 荘子

はゝ乃きさきともろ〳〵にしかも色〳〵はなへつきあらしけるあり
内よりも見る人ありよろこひけれはわかうはなやかにうちとけてみえし御いて給
さるゝれ給ひとまことにもそれにとたゝのきさき給ふよのむくひによりそ給ふ
あれはいひまてゆきをへ給ふ　花　ちかの物語あめのさすらへとあり
さ海にたつよとものゝ所するへあかしにそひ人とこそ
又日本紀に神功皇后三韓を征し給ふ時新羅王ちかひ
ひの詞に東乃日月に照らし出阿礼那礼阿のさかさまに
流る川のえのかりて星ともなるまてはこの国を退
精せしと以まてあり是みなあるましきことのためしと
なしあれは逸川をさして行ゝの国にある川乃名也とそ
弄　あるましきことのためしをいへり　細　かはりてもうらのけしきの
よにかゝる所のあるへきことはありかたきにかゝりしかしよし也
とあるをも所ゝなるにも　細　源の詞をも花に業(ゴウ)也

ことしのおほきさよりにたてまつ給ふ　宗　つれ〳〵にちちに也
河　逸意乃ふかさよりも懈(ケ)怠(タイ)にあくかれて
かしこをつたへるを　河内本
給ひてかく官さくらとの本にかは　花　律のさしることありといひて
除名といふ事也出身よりこのかたの数まめる官位を悉(コトゴトク)
除(ノゾイ)て無位の人になるをいふ源氏も除名せられまし
によりて無文の直衣を着給ふへしといへる配(ハイ)流(ル)の人と
ま必ずしも除名せらるゝ也除名せられて流罪(ザイ)せらるゝ
ぬるにもあるそれは罪の軽(キヤウ)重(チウ)によりて源氏の除名は左遷の
例を用ゐるや　弄　此詞をとりて見るに源氏は除名とみえ
ゆ　細　除名のことはあらさる　宗　除名乃ことを
又禁中にあるとしてもいはゆる官を給はるはなれあり
これのはをもまつ〳〵たる也
あさなられる事にかへりてたゝ　私　あさき罪也

宗 人ゝ官爵をとゝめらるゝにつきて流されさるゝ事は流罪なとにあたる
及んや 并左大将
朝廷をもはゝかりまゐらする人の 宗 法外の法折檻(セッカン)也
ら心しき事して世中にあるをは如何なる罪にかあたるらんと
宗 其ましくあるましきの心也 花鳥常の義は此心也
人の心をもきゝ給ふさまなるを 宗 もろこし此事也
とかくもれきこえはへりなへさらにつゝめる事をも法外の法にて
ともかくもなしにかゝるへきことそ侍るなれ 細 諸家とせしまゝしく
法て配所とおもむくるや大かた配所も定まるにや
宗 本国へ流罪のさためもさ候てとなるは八一段の罪なるにや
みなさとちかきことにはなそはとてつきるへきもしれんといふともそく
うかゝ見く色より如何さたなるものにのそきぬきさらに
世をのかれんと思ふ人心あるものゝゆへなにもさて給

宗 流罪の法とあれとも無官にて都にありしを此さんは法
の人のとゝまるとなりて掛冠の末に悪しき后の詞よ侍るすることも
よ侍ても朝廷の法にしたかひまゐらするはみな
いましめ官の法をたゝしくもしかるへきことをいひとに
きんあめ侯として 人ゝ官爵をとゝめらるゝも
まてをも申さやうにしてもかなはすとはせうてあらん
とせさくへきと朝廷きこしめすとの心也
若此法猶此法の時のかはりの罪にかはしきほとの人とゝまる
帝もし罪をかゝは法なきにはあらさるによりて経を
に 細 左遷の涙とも大切なし給ふまゝと思ふひ給ふや
宗 色より思ふくの詞也
更に心つくしともてなし給ふとおもひしに其人の家に出る
くまなきかれありなてられるまゝすまれ世にたく給ふを

君も　宋　源氏のこと也
いとおしけれと　宋　故との御夕霧と御孫にて乃ん也
まさに給はん人と世にも出給へるまく世の人のおぼえにやめでたし
ひ給ふをこの御方にたのむべくも給ふ世なくまかりなん心のうち
に思ふなげき給ひまし　細　おとなしき御心也　葵上と云ふ
よくそみしりて夕霧を見くはしくなれてまことも給へる
さぬ給ふ　よくそ見しりて　細　奇特なる御心也
物さかなくまめしき御かたくなんひとすぢなる中にとくまうら
給はく　細　夕霧也祖父祖母の中にておひ出給へることも
なりさんきこえぬ月日やたてて思はりんと思ひ給ふるをなど
まかりもうけなるとめしう給ふ　細　源氏は夕霧に給はれ
給はましさと也　宋　源氏の御心は給はで
夕霧の君を心にかけさせ給はし月日の御心ざしなんあるやといふ

いかにも人をもまかりと思す　弄　太政大臣也源氏と云ふ給をとめる
ひととなく　細　聖廟(セイベウ)なるとあり讒言(サンゲン)とある也　宋　昔は八幡の人
いかにも也
ちりしあることさら御るかに御まきるとも有り　おとりしある
宋　昔あるは也さまも見る程ならぬ罪にあたるべしともや
あるとおもへるにまく　宋　もろこしにもかかる人のたとへの也
人のはかなきものにもさらにおほやけに給ひ　弄　大道のこと
成王が奇特に上は周公旦のことなり
されどいひ出るのしるしそこしろすをも給へりなれ
細　世の人ひそかにこそいへと思ひて給ふべきことならずとこそ
あることさきなかなくとも也　宋　乃まへも一度の罪なくてこそ
流罪をもおこなふれとの心也
ときはめり給ひしに出給へることなくなんなるとおほしけれ浩

物語せさせ給 宋 何と思案もなく物ともいはんまてなる心歟

との心成へし

三位中将も参りあひ給て御酒まゐるとまゐりて給に夜更

夜ふけぬれはとまり給て人々御前にさふらはせても

のかたりなとせさせ給人よりはこよなう忍ひおほす

三位中将 宋 頭中将の事也

中納言の君 細 葵上の女房也 宋 源氏の心かけ給人也

いへはえにかなしう思へるさまを人しれすあはれとおほして

人みなしつまりぬるにとりわきかたらひ給これによりて

とまり給へるなるへし 細 いへはえに

ともかくもいはれぬと云心也 宋 いへはえにいはぬと云心也

引哥

いへはえにいはねはむねにさはかれて心ひとつになけくころかな

これによりとまり 細 草子の地也

夜深う出給に有明の月いとおかしう花の木ともやう〳〵

さかり過て 細 三月末比京気なるへし

わつかなる木陰のいと白き庭にうすく霧りわたりたる

そこはかとなくかすみあひて秋の夜のあはれにおほくたち

まされり 宋 木陰のいと白き庭に 宋 落花のちりた

るを云也

すみのまのかうらんにおしかゝりて 宋 縁のかうらんのすみ也

とはかりなかめ給中納言の君見たてまつりおくらんとにやつま

戸おしあけて井たり とはかり 宋 しはしとの心也

又たいめんあらん事こそおもへはいとかたけれ 細 源の詞也

かゝりける世をしらてと云て 宋 源の今極なるかなしき世をといふて也

心やすくもありぬへかりし月ころをもいそかてさしへたてつる

しよると給へきを猶ともかくも書ける字

おのれ〳〵て 栄 花やかなりしをかそへてみん年月ハ過行し
行てしかハしきとの心也
宮乃御前より里に出させおハしまし行けり 細 大宮より也
栄 葵上母宮也
ミつからもさてしまぬはしきと 細 是より宮よりの詞
栄 大宮乃御使乃詞也
うきさくしにみたる心ちさためしひ侍るほとに 栄 深乃ゐまと云う
いと秋のあはれ出さるを御覧るを 細 世をと思ひ給ふ也
さ侍りけるあはれなる心ちもし侍るかれ 花 葵上死去にし後
世なるへかくさをおもるましきん心也 細 葵上の生世
ふそくなることなるとそ也
ものうきさんへのいきたなきほとハおもひしもやまさくりを給へ
てとおもひしかれハうちなるに行て 花 夕霧のことやいまさる

あはれとハなき人のはなくなりぬるをとなり 細 夕霧方へ御文
さとし行へしとなり 栄 ものくるしきハ大宮の夕霧方へ
御文をはなし行けれと也
鳥辺山もえし煙もまかふやとあまの塩焼うらみにそゆく
細 哥物の見合也 葵上をおもひあるさ海也 只と海辺
のうらに出立也 栄 源氏の哥也 葵上の煙によそへ
の浦に塩焼きするのけふりをも通ふとも見に行そまさる
と也 花かる 鳥部山乃煙ハ葵上乃ことなり
御文にもえをなつかしくおもひ行て 栄 大宮乃御使の御返
をすこともなくとの心也
暁の別ハかりのつゆやむすはれしたるとて思ひ行つるへくとおもへらう
しきの行へし 細 宰相乃君よりの歌也 栄 うき物と思ひ知
給ひし宰相の君にも申給也 花 江文通別賦ニ云 黯然銷魂

銷魂者唯別而已矣

なりとおもひやるまかりすましきそうらうてはるなるなにとけ
さき程きこえあるまじう思ひ給へしるくほどこれとも
なにとて若宮にかきこころもてなり　細　宰相の詞也
宋　いかにも別からかねたれとも鮮かなるをたくひなるとの也
きこしめし給ふへきにも有て思給へなり　弄　源の詞
細　大宮への消息とるかや　宋　是ても中々あかねれどもえやむまて
むかしほ遠ざかるんの御ともしられ侍るせ給へとも
いまさら見にしへきを見給へんまつきてもゆくうき世の中ならば
くもゐへまてこれはなくもてはやし給はぬ斗にていさかへて
猶とまりまいらせ給はんとそ思ふへくのやうにきこえて見給へる人
月いとあかきにいとくもりあらし侍るすてかたも
いとかなし　いまさらなる人　宋　是も源氏の詞也

とくおほしたちぬへし　河　仁なき人まの虎狼も
一あまたさうらひしたにも衰知ぬへきとも也　仏涅槃の時
花　ハ虎狼も花をちらし人を猿なりてうなむとかり
一ちなみに鬼神もあはれとみるへしとあるんを同しき
やおそろしき物も也むへきと失心也
物おもひしる人なともしつ猶まりしそめてしくへくなれ
細　源をとめし昭乃姫なるとあはれまゐらしくへくさも也　宋　源氏下
二条よりの葵上乃人へくりかへさまりしとも
きとし人をおもえある給ひとおもひしとちる　細　おもひやるへまうか
まいらせや消息　宋　彼式アらき時消息あるもやうしハまうて
とうふかし也
なき人の行へまやうしとしらせむとなりしまたまる
らても　弄　此消息は面白様に源の詞かくなる也

細 鳥辺山の夕煙も都の中より出でて行きし人の煙を
隔つるべきものとも也 宗 葵上の煙と成りし故に源
氏おもひをませしむる心ありて行かんとも也 源氏と
まて葵上のことを心ハ乃至縁とのこと也
あはれゆかしくまして哀れあり いとくしきや無人
の別れとたれしもやうちなる心也
斎宮により給へれハ我が住みける人々もきとふろまたり舞る
くるしさみて宮にも遠ゐて流れしとのこせとふる々く
ると也 并二条院也 宗 わが住みけるは東宮し
たかくしひとつハ之でかうはるかまつるかきまへ法住みの京にする
為紀会まうでまして 細 斎上ろる也
ここかしれぬお憶えほどうやくあるとなりてうくりこさと
なさかれまく宮もくはこひし馬車也とるとあるくさしきに

世もうき給ふり夢つもとお思ひしける 宗 恨むることは服
色刈りて染れし人めうしといへり
なつへたんなるとも故人にちるさまとて 花 基盤ハ斎上
刈るこひさしくきもちつて来ぬ身とはちりそこたる也
宗 供奉乃用意もる宮といへり
斎ミ宮しひさうなしるとも 宗 思ふことあまて宮ミ通
乃りは程と云ふかるとまして以ての給遠ゆかんと思ひ給
細 後此て斎にあれける秋乃庭ニ心憂るまして法
ちらん露の名くれとあるもしんてとかさとり
みしのさへすわかるも給へれん 細 葵上乃こと也
みつしともりしき見あるし給ふれハ 宗 おもろき
ちすめ給ふ也
むかのこるとハ又絶れたる人ぞ宮にて心あそあはれさ

さくみのもてなしさもおもしうて出つることなん侍りまかりは
さく年月そふもの依くことさくしも　宗　きとのこころん
思ふ大臣のこころもちを紀伊ほとに見きまつくてねし
名のさる御也
あるもえて御やゆきさらしんちと　宗　宮みえちの
くれなゐとのへ也
たしをあるまの十五事さんためのこととかくさむ　細　平生
いやうのらゆみいはんもともかりにしきことと云るるも
よくいはかくして親の中をさしうちなん　細　源の上人ト給
詞也　宗　とやうやしてとの心也
まひのとをはたる様まやおほしなしつる　宗　何の思
ありされやうに思ふ上の心のよひ給へんとの心也
かくてゆるほしさにためたれもとともとく世とくある

るさくにいふをしくさことのととのつくるおほりうまるを
宗　いまさき家はある時さにめつまつしとなとも
もさやうきもまうそてやいはしるみ紀世にへすとらもそれ
まのとさもよりまいてんとゆとわしくてるとや中を給ひて
もさやうさまるも　細　無言顔
く源氏と見るよるをおかしにおほしさるまつのかれいにも
さくらのほとくにさしとおほしてるさ御人くらとかう
ととへとうとそうし　細　思ふ上の詞也例のおほんか様
まやおほしちすつるとあるくとうきその詞也そかれの
の出来ぬるよりをみれまうてとうしなちるをへいる
うちとの給也　宗　源の心ちうたまるめとも見給ひるを
うしとおもふすいちんとも也
父は子みいつとおもろんまとゆるをおもひしはさしたある

双
宗　紫上乃父也前坊とまうし源氏とおなしくともにまし〳〵と
孫とものし母后は世をとくうせ給ひて兵部卿と給
とも弘徽殿とも源氏乃兄弟也
世の中をとりつくりたまへてとつまて世の給へれ
細　紫上乃父宮ハ人めをもつくろひ給はにほ給ともみさ
とは紫の上をは懇にくと給也
法とかくひまなくたゝ給ひぬと人乃みなさんなるもてな
つしう　宗　紫上の心也父宮乃のたまはしまさぬるまと見
中〳〵志てまいらせて中宮のまうしとまて母のいまそかりし
みそうかりしをハ乃あまとなからしさ　細　源乃よはの
おほしまさんとも志てまいらせてあるへきをハなにとと
と給也　宗　中〳〵文字は紫の上にまいらせ給ふとや

ゆゝしきなしや　宗　いまゝしくしきことの心也
わかみ人々にくむつまきてわたまへ給ふ人々やれとの給事のよところ
ゐまうすきありてまつ宮乃給ひかかまも心につくしうくきれいに給
まうとたちてとつまて宮の給ひ給文字の中に
息君にそあるゝれなる　細　くらくとハ継母又母上みもしも
中〳〵ふ給ひ今源よ身を落まてうきなるともすみ室ぬ給
とおもひしは文字ともなくわたまへ給ひと継母乃心よはつき
さらみやしくと云給也　花　紫上の思給ふ乃へくよみ給
るも母君のうくゝ君と又源氏によりて別給ふとての継
母君の心をさうく云親也
宗　紫上と源氏との間乃ことを継母の方われのひしるゝや源
氏ハ桐壺帝にそねまれ又母更衣又葵上までに離給ふ
くらまつらくしきんとや

清少ハ海なる　宗 紫上乃侍る也
花宴にゆるされかくうてと月と人を見かれ中々とも
くもりんたうとハ人さくのいとはさなかるへきなり
細 源の御心と紫上とおほし給ふよしをかたり給也
おほやけにうしろめたく思ゆる人々　宗 天子ハ花枝摂の心也
あきらかなる月日に影をうつさにみをともゝろうたうとかる
まかるよしいとはかなかるなり　弄 本説は何一勅本説未
君之意ハ世相遠也遠天意とハ日月の照臨を可
思ゆ也　宗 天子を日月まさとかる也
あやまちなきれとさる人さえにてそなる事ともはゆれ
とこのにまして思ふ人々ゆるさるハあらさりけるをと
ゆるへきかそこ　宗 ちん世のちにしてそとや
思きまむまた給へかし花せすて　宗 かくむまにとなる也

たちまちみ色宿なんなと　細 又あらかしてと
めて御みか手もの出来ぬへきとや　宗 あらかしと於
うきよの出来んとの心也
まさしきをせ給　宗 よくやまさらせ給とや
白衣く深きて大とのなまうと　給 三条よりさ夜あらく悔
給しきかゝの心也　宗 おとくなる海路くさ海く
かなしと紫上まの給て女ちに日をさしきたる也
帥乃宮　細 蛍乃兵部卿宮也　宗 源氏乃院逢枝也
三位中将もとおりしたりさいかんし給けんとて涼うとし
たのしむる位なれんへさとて　三位中将　宗 頭中将也
むかしんの涼ありとしゆくいとなつかしきとさ給てから
やつれ給へるこそめでたし　涼もんなさ給ひて見ゆうた
いふかり給へるに御やきき給へる御の我なかりいとあはて

にこそあれハおもひなしておもふへきなれこの字け此
やうに御をそて給ふ程たるわさ□れとの給へし女君ゐうる
とひとめるをそしみをとせ給へり　むらんの流をよし
細 官名とりてまてしや　宗 源氏の官位すへてなく人に准給
故よむもんと云給ふや手紙の事ならやおつるひいきし
らとも心あり又般若にわうされとも宮花乃云へてる
とも宮常さんに河同
いと思ひらし　宗 源氏乃まよくゝる死心との給へり
身ハかくてさすらへぬとも君かあたりさらぬ鏡のかけハはなれし
細 源の哥也　宗 身をハひきすてゝ行とも紫上の見給
鏡の影ハ離給ましきとの心也花乃顔に鏡乃くもりと
心へたるを給ふとうすなる給へり
山思ひ給へるも

わかれても影たにとまるものならは鏡を見てもなくさめてまし
細 紫上　宗 わかれて源氏ハ別給ふとも鏡に影の残らハ
まゝ見給ハゝ見てなくさまんとの心也
さし給かくれなく□て御殿をまかりて給へるさ夜
あるさまに給ひたる御ありさまの給ふとみるとおほしきこゆ
なき人の清宮にてあるみそハ哀なる渡殿ほとのさうし給
てらして御とにくらへ給ふ　みそハ　宗 帥宮三位中将なと
とて薫らるへく海給たる人へし
花ちる里の心ほそけにおほして常にきこえ給ふもことわりと
そうりすて　細 女御乃事也
かの人もとと一たひ見給ハゝはしくやおほさんとおほしてそ
細 花散里の人乃こゝろなるへし
いと物うくてやかてかりしかれハ　宗 紫上の清ま

たち出給ふしとのへ也
女御かくれ給ひてのちハちかくもなかりしをしよろこひ
ひさしく絶給へ御 宗 人数にしゆきとて女御のよろこひ
給ふなる也
うき侍らんもうとまし 宗 彼式部卿宮也
いとゞしくおもひ給へいつる御有さまたゝこれはうきにかくれ
まそてもとひ給ふる也月いとあかきさまなといとおほ
しゆるまて夜のうちいとゞくもりて 宗 女御の御心也
月おもしろく法し出て池もなく見山木のけしきさ見え
るもにみなす也 宗 源氏の御心也
もとこそかはらぬもんなき月の影もしゆくる 宗 きこゆ
乃ちすとなり
河古 心あらん人は中に中々あはれ世の秋ならねと こゝろなん

西おもてハくらしと見ゆるたちやすらひてなかめ給ふ
あるにゆかしれたるたる月影のさしいりけるをあやしみ
にうちなかめ給ひつるもひとりなかめてとひやり
ありなん給へつらむ 西おもて 細 花散里也 宗 なり
又御出あらんとおもひかけぬにて八おもての心也
まつさしいりて 宗 花散里のさま也
やゝて月をみんとおもひ給ふに御殿のほとにかくさるゝ
うちに ひと 細 花散里の用意可然給へるさま
月かけの影ゆやかくてのこりいめん 細 源の様也
又たえしもやとおもふ 宗 えしもやと云也
あとちなし てる[illegible]年をふるとも 細 云てる
しうちとて絶たちなるかも梅や引きて及人
くるし 宗 給ふもなくてるはるとの心也

河古
むかしゐ比立ちしまゐ名とたゝはとゝちすぬともまたあしかや
常夏の花をなかりんハ也とちしはなる月日もみしかるへん
世為ちるすの後也日本紀にも多ゆやとゝちすぬともの斉
月令也ことちしゆ第ハ無第ナ比一名ともに称略之
をとめしみを成ぬへきみすそちふとちかくんのそまる世ちかく
とそ有られともそ紀すしかこのゝさもの語らくちるをもしも
くるゐをた　称大納言ちつゝもとゝてやうとゝらしく

好色乞
よるハうつてしうちす出羽へ　宗世つるとちくるまてや文称
のんすゐも以くるらう
まへ乃月の入ちつゐやとようへらまそて哀なり　花三宮
より比羽し時中納言君かあ羽し暁の月乃出るちし
ひよそへられて哀ちるゆへ氏例乃月の入るとも世上

まみえらり　細　花なる総中納言君かはつくまる羽し時なん
るすとひきちこふく只月乃入るらとちあるにむかひそ
なくるちる人し例乃字ハ無称乃なき　耕同
女君の三紀はそにくつて　細　ち紀とそ紫也　宗　気よ書
の色まおくきて白梅ちるとやと以てはやくと云て
ちてぬるてゆくたる地とらさ
まくぬるく風ちちれハ　河　ひよ於て物ちつるの我袖ま
やと成月さへぬるくかるる　耕は同
月影のやと成袖ハせさくともとあてもみえやあるぬひくると
細
花散里比んのちもきてようしさはさちちく
かんしふらのかるゝ海の例乃名称　さめとはくともせ
まくしあり我数あるぬかしも此源のえんハとくあてをと
さて力くるれ紀ゆやよのはよ比丈女のへも乞るゐハるそ

まかり春同　案　袖乃せまきハ卑下也
いかしと思ほいてるらんかるしられハ人けなくさめかのゝ給
細　事柄まて心なくとられとおほされてもしきられたるく
さめ給ふ也
ゆきこめくるも清井にさむへきを月影の光にかくれん雲を添て
細　女君をと慰めあるや座りて立給へきの事也
なくさめ給とハ清かなるもへきと云んや　案　花の細
まく何ともなくさめ雲の給とあるまるを心なきを慰め給ん也
一端てそ清きあるまき給とても清ある八部まて人々給
りん給ま春同さりくる風をとなるめ俺給ふとの心也
思へたりうれしや　案　かく様まて京のそおそれをとくとお
も人をりうるしと也
むくさぬ袖のとてそんをとくて清まの有れなをとの給ふくら

なかれの程より出給ふ　案　源乃先立まて心をとくて清と也
枝様　ゆくさとを思ひぬ袖乃うれしさハたらぬ氏へまむつるるを驚ん
よろ何乃まうとも思ひてあさきも給ひ志てもしてきまつり
案　左近乃清用立也
世よ有むかゆくさるを此人て座のまにさりそむす人へきかし
と清くさめとりも給清僧よ志てもひかゆるうきらいへまいさえ
つとめて行つり彼山里の清もてを心れくるし　案　源よ不移付
ろひまま世よ有そ有ひかぬ也
見清くまてとる清くひ行へき物とも　案　山里ハ清まれ
るまやもしきてるハりなかぬもの也
おと清くにうえひまちかてるさへ心をくまつ清る人き病
ことくも　案　仕立無功清りそきうたるき俺也
文集なるをへあるたこ桜八卯の心とりそまいもの給

花 白楽天乃詩賦をあつめたる七拾弐巻あり長慶集と
いへり長慶年中にあつめたる故也 細 白楽天か文集也
宗 皆多乃文なとへ入たる所也白楽天か在道に作るものあり
作を花にてうつせ也花やかなる作をえらひ出てとかくいひし給
ひあやしの山かつめきてもよしなきもてなし給はすあやしく人にもよみ
きしめさるゝなり 作せさる作てえと 宗 絃管なる西難多也
皆よしなる事にはまはましやうし給へよし給 細 業上也
みさとともにはよろしきをしめて 河 法唐 詩牧 細 皆西所なる也
作る人もあるに此券なるとこそまうとのきよそれなる限なりの
ふるまのちかきの度なるをいひてまてお納てとこそふるしき
物は見えてとき行へき 券 河 立券文 細 券とと文読の物也
宗 かの横の物こと業上の非ましたる所とも也券とて西所のことつき
の文なる也

立ちさま所にいつものもあるかことさぬさはせ物とゝめ
程あるにく 宗 お納なまそへてえ立たる也
正歩法くらの中務の中ねたるとかやれ人もへ（一本の文字なし） 升 二条院源氏
さしの人々也 細 皆源のはくひ所人也 宗 此方なるも源
氏乃みえとをもしる所人也
つきへ立かほしてもあるかあるへかほしくさそへるあるへきさまあり
迷ひゆるまはつきてえもやすまへとも 宗 源のゆるへく此やうに
あらわれとせめてかなしまてあへきまんまて様に彼所様
へのうてうた宮えんかをもあしんとおもまへとも人々へくのゆ也
命あるとてこの世にかへる色なるやうもはかんとおもちはまん
とおもうん人は 細 源の詞也
とあさに作りてへとの所く 細 とあさとへ業上乃作る也
作るしもみあまりかやし世所 宗 業上此作まへ人ことに心あ也

源氏云給也

わかきえ此頃めの前にたちまちにかはるさまをなけきとも　細　宰相

なとあり

ねりし紀之海のへたる物なくまめくしきさすらへなをし

さる此事なし　栄　ろさえたる物へ中に及ひ候可然猶と

とゆめて打眺めしなくなくもさらともなくさへたと也

御涙の程も此比も日くれまなくしてなさくしく路か

栄　勝月殊也　此人故有り左遷也

とかくも給ぬへきとさるへきに我々給へるかく　細　源より故人の道

に無き世をといひさらぬ外とろうきをはかくさもなくひか

さらに人そかりそれ　細　勝月殊なもちとうらみさる也

あらきる此浦の川よきうちもやみつるくまのうらめしけさん

細　云々なるよ此中に積給用名浅からぬ者也

若菜出ては相末広塵積此文をとなぬ此古状との給ひ

とも下積の所也　編(ふり)て事へ云又するある中にも我思への切なる

迷ひけるてとも中にあそなる心のある也　されはあかる節

なさ此とくとさあめる也　用に云可然のある也　此云縁後成る芸

此物給の中第一の事とやまさきつとあん　知　あるとき

なとは流罪のさしめとみへるにや　栄　源氏の事もあひ給

なとくとも何かをさせとよめるは世中への用心也ろ此故は

事あるとは新発物すれは必定もあらそまうすものゆへに須

に流しへつかうは左遷にあそんとの始めとも有るもの

なとは水とおなしと思ひて河を云又何からなと云々

とも左遷はのうえうへとのこと也　河　源の川なとに云続

あらえ後撰に男の浮世へまかりけるに行きけれは

首てよ須磨川まて神にそえあるへくうけれるとありつる也

伊勢国の名所なりと見え同集に伊勢わたる川は袖より
流るれととふにとかれぬ身はうきなりけりとあるも是を
涙のかはとみえ文選にも水流而日夜不息とあり又源は
うらもなる也瀬々名所も一流にもわたる事ハ五十瀬也此伊
勢ともいふ後撰にハ女ハ式部が物語の中ニ身一つの秀歌をやさ
迷歩かし水尾 万葉 水涼 日本紀 澪 同
也思はなるのとをすん清きのかれくさ〳〵縁かある 宗 千枝斉
云ふは猿楽にも左遷ハの事也ぬらしや
みちの御ともあやうきれたる海のみえ内々縁はみ女いとめつらし
忽にかくも行て思ひ行へとは純なるよ源まかるも下ゐさうなん
宗 津かわさるも道の外ともたまいとまかれとやむしろ由なくて
八そのなや
瀬川かゝくるまても涙ぬるかなきまて瀬の中やにもまて云しをて

花
内侍みるらむともかくハすさも清めよしとも流るゝ瀬のかとをと
海京のうきつき瀬ととまるてとかる也 宗 津の景の
返事也左遷ハ一さひハ海京名物よれたるまつきせん
ともあるらるれとまへもきたるとまかるてまくちり
思清んとの心也 細 みるらの味也
あるらくみるれかさ縁かる清よいとはかくの留あかりきまてひ
かゝはめんなくてやとおほきてハ花くちかしたれハお帰りぬへ
して 宗 源氏乃心也
うしやおほしゆく 細 大后のこゝさ海かられたるや
ゆくを花はしておかたるをあかく清思ひ行へといとあれかち
此とも学たる縁かは[illegible]のぬ 宗 あしも后ますかに是枝なるや
大かたるもあかくもて思なへしさのとかひかりし行くぬとや
おもとくてのかき迷かて 細 かくハあされともよしてあるる

の間にあり 哥 かくハあれとも法ハ命日にも立給ハん
御の程のゆくすゑをおほし給ひて小山へまうてて給 哥にいわれる
所とも乃ハ栄花物語に岩陰と云所に御廟有
るよしあり今按乃るまし思くしまう見へし岩陰ハ松原
の行く乃ハ所也 天暦 三廿一 陵にて又栄花物語と此物語と
乃時代同じ可決 又七月八日比なりけるをとものにあはん
しきのハ栄花貫九寛弘八六廿二一条院崩御 葬送七
月八日也 細 小山ハ岩陰也 岩陰ハ松原乃奥也 天暦御陵云
暁かけて月出るほとまれなるをまつ冷泉の宮にまうてて給ふあさ
みちのほとのまへにおはしまして御ものかたりなともし給 東宮の
御さまとハいとうつくしうおはしますを御らんしてなと
ちかきほとハいかにのあはれさ添りおほしめしけり
かくてたゝ又御ものおもひのかきりなくかなしきかな 栄 暁かけて

清へ参給はんとおほしめし給ふによそ入道の宮へ参り給ふと
見るへし
寛弘 長和云八年霞ちるほと此山のまつはつはかりきて月出るころ
細 寛弘の御事にてかくて下向二月ばかりのころ又武子ころ
なりける
ほとなりし御心地もいとなやましけにおはしまさぬ時なれとも
さらにさるへきもあらぬすちにもなりゆくきさま一さきハ
うつれまさりて猶いとしなしてたゝかくおほしいり
をも又清涼殿にて待りけるに 栄 入道宮の清うるはしきころ
中宮なれとも中宮さまなとものの御心ちうへそれ
御さんなとも さらにとひのもぬ清涼殿にて 哥 源詞
かきりなきあはれなるに一夜になん宮もおほさるへし
侍る 栄 今様にとひもうきを夜なけ過ると清涼殿へも中宮

人の密通乃後とおもひあはせらるれハ宮おそろしきと也

打しるしたる人ハ宗にまうすてと　宗　源氏乃御身の事

との給へり

宮乃御世をさかへたまふ打つゝきまさらせ給ふ中を給ふと也

ちるとなるや　細　故宮の御事也

御覧しミるも物思ひしかしまてあはれに御心のうちにまて

ふる　細　是ハ哀傷也

ふとしゆりえ給ひはた給ふなるを二のあはれ所なし心にて

きこえさせ給ふ給ふ心きつと涙をさせ給ふなりけり

ふとしゆりたまひし　宗　ふとき御との給ふなと也

深山に山陵とたてまつると　花深山とハ山陵をいふ也　宗　山陵よ

其山れたる所也

深草とつてゐと宗祇よふとふ御寺の事を給ひよりとかく

おほしめし給はしきまたり　宗　清涼殿へ参りおはしましと

入道の宮へも給ふ也

なにしきおほくあるはなるゝれき世のならてそとろもきこしめしてなきあはれにおもひちりしかハ世中にあはれに侍らひてまて歌に

あるハおほく哀れなるにをまて　哀傷

小町　細　哀傷の歌奇一乃句ハ哀傷二の句ハ源也

宗　なにしきおほくなるにハ哀傷乃詩のあるはなるゝれきとハ源氏も

近乃る也志きまてゝしても世のつひにもなれと也

いつしき給ふこゝろまてとひとりしにおほしあつかひなとしも

細　花をも御覧し也心ならすと浄なる事とも乃御方にて穏なる秀逸

まてにもなれと也

えうはなもとちもおほしめし　宗　彼式アりて批判也

別しみかりきなるハ涙なるまひと今そ世乃ことさハまのこと後

弄　源故院の御事にかゝりきなる檻たるふるまひと讃給へり

宋 源氏君院の御事のあらましをさしてはかなさたるにや
ものの給ひは世のうさをさしていふなり
よろづおぼしくらべて此御ことにおもひ立たまへるをいふ
むつましきかぎりにしる心ばへをあつかはせ給へる 細 暁ニ
まで月出るほどなれば也
京にかへりたまへれとなりし世の御ありさまにおもひあはせ給ふ
いとうれしうおぼさるゝに 孫 御馬ともの御ありさまにや
宋 かゝる時はしのびてよろこびをみるなり
うれしさ日ごろのこゝろをおもひいづるほどなくすゞしう
宋 其つゆとのの日ころの給ひまゝにしたがひぬるにや
蓬生の宮にわたり 細 中将の御かほのはなやかにまゝにや 中将
新 京極殿あり
たまきのさまなどをさへいふべきにや もとつゐのかたもにもいつるを

宋 立位に任して官爵をとゝのへさせぬとの事也
細 源氏の家人なるによりてなり
住吉に詣でさせたまひてよろこびまうしたまひしゆゑに
なれなれしき人々のまうでつかうまつりしなどいふなり
宋 源氏のゆかりの人なれば官位をとゝのへたるなり 河 解官有三義
一ニ妻解 二ニ病解 及百二十日 三ニ限解
これはかやうの御いはひどもにてかしこまりてまうでたるなり
をとこ 宋 下野の社をかんかへ給ふにやなどいふなり
もとより京にてかやうにしたまひしを思ひいでゝかくのたまふ
宋 かくとの寄ぞめの縁よりつれてとりくる面白のかたち
うたのおもはかりしひとのたまふ縁なるにや 〔?〕
あはれに此方よりいはせたまふにや 細 神もうけひきまふとや
せちにおもはれまつれてむかしの人よりあらたにも心やすくおぼしきを

とおほしたるにもこゝろえてさうしのおもむきてこゝろ

のうちにある語とて　宗　源氏の心也　玉河の注にも中にたゆ也

うらさき右くさうたれやう御しと也

神よまゐる事とやしる語也　河　辞見　日本紀　宗　清つとあり

ひし語也

う紀世とハ今そかりまいるゝにかしこきハ今の神の御代ましそて

宗　源氏の考也わかるへきハたゝ遷のこと也とるむかしのを紀たる

きれ神よまゐる事のこと也神よまゝくせとの心也

世の語さへ地めてとるカ紀人ふくあらはれて語りめて

たしと見人まゐる清山にまいりて行ておもふまゝしく清月清へ

衣をめたまへの心やうにおほしいて風　宗　右とうる事とこう

うきるとたえすてともはまさくあるぬるへきいかんうる紀く

くまちわしきかさあうまる　細　十善（セン）帝王代行をも生世を隔

行れハ何るを色口惜とか　弄同

よろつのことは紙あまりくやしくもうれてとうらとおもへし

にうれうれを語りつゝ行かくそ　宗　玄人の清前あれはて清々

るゝもあらく玄曲との心也

さもあるまおほしの語りそしき海くれ清ゆかんハいうちる

あくしうせたんせんやかりけるし　宗　故院乃清ゆへの清まつり

ま源氏乃清る清さくるの語をさしハ皆さうふ

せさるゝ也

清ちんハみちの事まさけくありてうちをいうち語給とかや

露むきに月も雲ゆく事てまいのさうちこそとくしまと

うへろハそんうもあるちからしておもうる語り

細　古墳何世人不識姓名化作路傍土年々春草生

と楽天か作也るんうへひとく面白也

有し法の御せさせ給ふに見えて給へる 細 幻のことく也
そこらの人もさはとあり 聞 男の方も出家する称也
あはれ親やかうみるらんよそへいてたちかむる月も雲かくれぬる
細 打思ふ月の雲かくれ給ふを見なく故院の我方を法縁
もるかすや月の隠るると心のやみに云ひとも給ふ也
藤壺の寂の中のかくと思ふべし 哥同 聞 源氏の哥也
あはれ親とは故院の法の中也 月をも故院にたとへ見
まかるは雲かくれ給ふは我みなとうしなひてかやうにかくれ
給ふを中ゆくへは中宮へ寂ゐの中をと思ひたまへる心うき也
うとのんも心かくみえんとは院の御とも法師ともまし心のせ
事也此上心の相あひくに給成べし
降すへて給まへくつ給ひくまい宮にも法せさせて心の給
王命婦をも法せさせて給はんとすへく給へはその法の御所と

て 細 藤壺の法せさせ給ひ給ひて后の位は有ねんなりて出宮も
あ給ふ人也 聞 中宮の御出家なれは三条の宮に
おはしませは我法の御まへ
をとなんとかいうなれは給へ文集の給へりともありぬるあらんほ
まされるまへにまかてぬる給へるを出給ひて逢給ふて書
ゑ 聞 源氏もゑ出宮への文言也 あはれも思しあはまるを也
いまさらさみたるあはれまさるとも也
あはし給へ 聞 命婦に哥給へ露にまきのかくれ也
かりの文言の心也 此花を見む時とあるに此はりして
細 出宮を中給也 聞 時もしあへるをは源氏大臣の法分
山かり所をとへ給へり源氏の哥也
さらにこれちからもまたらへるかたにつきたまへかくあらんと法縁
せさせ給ひて 細 ちりまなき心あるまじ藤透（スキ）也

おきふし給ふにもまのあたりにてかくはしまさん御返事の心
物し給はんとかへはもかれハ　花　此時春宮ハ八歳に成給ふ十八乃
御年也弱冠なり　栄　源氏ハ大将の時サス子宮也
ありしよりにも思ひ出て給ふとなくはましてゆくにとおほし
との給へは　細　春宮乃御詞也
物をわれの御返事やと思ひより給へる
あはれなる心ことにみゆる也とよく行ひしむしたる物
乃御前にひつきたまふる内にとりを思ひなてもとはれも人も
まつり給へるともは世をとくとくはれあけさせ給ふと申や
しら　栄　王命婦か詞也　宮の事ハ彼中宮へ申あけたるなり
物をもよく思ひし給ひなんとあはれめし歌也
其時の御使を我かたるとも返事也
我もひとりまうらんともかやうみえおほゆる　栄　かく御やう

あはれと云ふ也
御返ハおほかたに申させ給ひ給ふ御　細　是ハ王命婦
乃文の詞也　栄　命婦か源氏へ乃御返事をさしあけ申
中さかなへし
御まへみえさせ給ふなんほかきたおほめしたる御返
こともいとしくなんと　細　春宮の御まへにまいらせたる也
栄
命婦か文云也
ちとちかくなかなかんのきこえあるかたるへし　栄　命婦かこころ
乃きこえあると源氏乃御頭なるんや　歎　命婦乃心
さとなくなく花ハうきれと行春ハ花乃都をとさすちかきみよ
　細
花の開落を源乃宗原よりして云也又こん春を也
給とも　栄　王命婦か也源氏乃家花の折ふしへおもうへと
咲かく花と読てさきれともなた逢し給ふもやうて御家や

まとのみや
えんなる花の春ものこされハ雲てくもちる花心をとなし
付しあるハと申て花紅も見えたる物語として
細 付あしきやうにて源氏ある人ハさ申也 新 打あまた見ん心ハ御也
ひと宮のうち思ひくらす花はつて一めも見んと思ふ人よく
おほしくけなき無る御有様とおほしめされしとさこしぬ人
あるまりてはひとり春のなれなりしハまつりとよひ路に
まうさき 宗 妻宮の御中思ひても思ふハこれも世にま
さくらとてのんや
わきめとみれ中に心をまりて 細 いやしき者也との字不清不濁
きこゆるやうにかりむへきとや 宗 おさめハ長(女ノ)ときかと留り
下女の中にて人くはとる物なるべし小曹司なとと云名也
みのたやうもいひとまりぬるやうなるへハ雪隠なとと云よ

きるんやゆきとくかろれにとせたるきたことと云花也蔵也
みるもゆ中しさんなるへし
有りし花のうちよきすこりつるをまつりふくともみへき
ぬほとやるんとかはひなけきなき 細 普源の恵(ちゑ)の下
たるゆや
大ちよのせかんへもとりれかくろくて思ひせるんあしけよきす
何し二氏ろ見んとの哉事ハのよ為るたかて心路てそらし
路ことのうちよぬハたなるとしく 細 此路かめ雅もしくん
よろしは思のうしや 宗 そとしあくて雅も友達とも紀
あらしくきをまぬとや
此御ハくるりにかくらぬ人なく清くとり待こそぬや木有
し 花 清くくまてもかんや
やんなとなる花上ま市年宮なとの中にもおほろくろまう

まことに数ならぬ身をしからぬ身ならねとはゝしめたまひて
宗 左のかみも限りなき人にてしちハ朝奏（チキワラ）とも中くとも源氏
を演（タヾ）なするとの心也
いちはやき世と思ひけるをそ事ありさまあらし
宗 悪后のとりしひ給ふ世のさま也
世ゆすりてをしみ奉りたにハ后宮をはしめとそしり奉りしを
なけれと有とあらゆるハおほやけをうらみ奉らんとて天下ゆすり 花 蜻蛉（カゲロフ）日記云
西宮の左大臣なかされ給ふをみ奉らんとて天下ゆすりて
まとひてかの宮へ人々まいりつとひてゆすりたるハ動と云心也
宗 世中一同にとよめる也
紅のひろめかしたれハまするや 宗 世ゆする源氏の御あやまちも左遷あり
おほむくへとしたかひてハなき身の罪もあらしとて 同
好らと乃浮ん也

かく思ひけるとハ人しらぬを少しもしる人おほく世中ハあちきなき
あさましかれとのこまかにきこえまてお思しきゝ 細 世のなかしる也
この日ころ女君ハ御物語のついてにゆかしきすこし給て 細 此日ころ
いまゝて下向する也 宗 紫上也
よるの秋かく出給ふもおなしこゝちのはかりなくひとつくなき
て給ひて 宗 此比ハ紫上とさせるそて秋源出給ふ也
月出るまでありおはしまして出てみるにいとく守給へし
細 今出ます給也 宗 源氏よみのみ給詞也
いふかひなきまゝにおほくはゝかりたまふなるとお思ゆんと也
らん二三日前さらにおそろしけれハあやしくいつまてなんち
するものとそてみるこまかきおきてかくてものいさゝかひまなき給
をとも女君ハなれもつき給へるをとめしらひくなかさら出給へる月
影にいとうつくしきまてみゆ給へり 源 源氏のこと

なしたるまての詞也　案　是を除きて中々とくよくのつゝも
らんやとおもへらんと也
露かゝりてとられさせ給はしけれぬるを除けに
ものへ給はんとうしろめたくおもふれと　案　源氏のゝ心也
を除かくましものしく御詞は　紫上の御心にさしを
らへ給はんとのひ給ふなるへし
折りしかなとたるへくとおもふらへなれハ　案　源氏の世にあらく
御詞かくるとくの詞にて源氏上の御詞はんとて出つと
源氏と女君ふ命かくみもしやて慰めてよめる哥也
はとしらるへなれともなと女君の歌かいとかしこしと[?]との
ん御へし　弄　源氏のなりしこのことと紫上　よからぬこと
とて慰めらる哥を讀給へり　細　うしろめたくハおほすを
女君ことなくさめてをとゝ詞也いとしも此心文字ハ中にてめ字也

いかなる世のわかれとをしても命をとへなくも中と申られ
弄　源氏世をのかれて此別をとをしても命ならさりなん難かける
御へし給ふあふりやとおり出とのかたのしともふへし
てたゝ太子にりとなるに給へる女君をなくさめ給也
まられしなると頼まそくに中々なし給へも
をしからぬ命にかへてめの前の別をしはしとゝめてしかな
弄　紫上にあらせて哀歌なし　案　露命にかへ命を源
氏の別をとゞむるものとてもあれと我かひ給ふ哥也
をしけくをおほけるんといふと見えすてもあらされと也そな
かゝしことあるへきにまつといふにかて詞の底をとりゝ命を
能はとそひくも心もなくうるをなく時母ものことを給ぬ
弄　浪川よるとなるへし
白たへの袖の別れに露落ちて風さへつひくまとふの時をさりた

久しくにつきて納めならとこふ人ならなくてもうち播磨をおもひ
給ひぬるもちはん倍りしこともわりしこともめでたかりけり
新
一日に被濟へ下りたまふに不審也給ふあるやまさこ大
やうにかきたる也 細 是は心得たる永日なりとも旅に早速
の心地を覚えぬにいかでかなるらん常にわかるるや
抄
都にとりて須磨の山かんふかれなるへくや 宗 永日は旅情
行へう急ぎし行るらんや
細
おほとのとはひ帝の御事をいひあまりて松とかうそ書るし
なる
細 東宮御廃の時の摂政也松ちるを跡とかりて東
宮ありて後とて都に入給ひ也一代一度の東宮の摂
録はれてかまに申るとかなるにや
宗
是は東宮御廃の時の儀にて下向の時も逢坂とこそ給
御京の時もまた大和路とたまひて摂津山にかかりて難波
みて御禊あり伊勢ほとにて七月ふ大江殿にて祓
十日めに京へ入給ひし也東宮御京は此時の所へ御御又は御
代ありにか御京とあるも不吉のよしはかりて出
きなよし跡とて当代に一度の東宮の摂籙なれは此ま
たるさかなる申や 花 弄 説同 抄 又さなるときは一代に
二度とも可言との一説
つくし国にかよひとあるへくもありしかとおもふやん
細
汨海に屈原とひとり一人ある人ありしかは
宗
源氏の君は楚国の屈原か汨羅にしづみしかとおもはれ
ふるさとえぬなり流人との心也はかなきことのあはれ
なるに限りしかば大江殿にはかなくもたる
とみゆるへし
おほきにかたる給ひけるとかん給ひてしゆかし

まちもてなし給へる御ありさまをとめれとあやしく
こよなくまされるすちとのゝ給ひけるを人々くるしうおもひきこゆ
ことにつけてはあはれもすさまし思ひはなれ給ふにも
引哥 いとしきをとゆくかたもさはいつとなにしもありけるを
弄 業平須磨にて此時源氏寄此海を伝ふ源氏もとめて須磨の浦にもしほたれ
八重たつ雲井をさしもと源の吐し給ふ行平は須磨の浦にもしほたれ
細 雅もまうたるまゝにおもひやるれと源の吐し給ふ行平は須磨なる也
まゐとの三千里外の心ちもするに
宋 漢書へも此里なるもと三千里と云事也
三千里外随行李 二十九年間任転蓬 白居易賦
引哥 よのなかはありやなしやの須磨のうら
わかれし人の此をも思ひやる也此物かたりにて須磨
ひのもといくとせなかくらし又とれは
宋 須磨の浦
さらに思ひきこえ也
細 此詞面白
なきとみえけれはいとゝ心ほそくて物をのみおもひ給ふ
宋 源氏寄也霞をなかめて須磨をおもひやり給ふにも
らぬ也
はるかなる海つらなれは
細 行平の須磨の浦にもしほたれつゝと云
心ちするもはるかなるかたは見えす霞のへたてて感慨深き物也
宋 ひのもとにもはなれたる心ちしてはるけき心なる也
わたりたまひてさしも行平中納言のもしほたれつゝわひける
家居ちかきわたりなりけり海つらはやゝいりて
よんところなる山中なりけり海の上をはるかにみて
つゝかなる程よりは舟よりわたりて須磨なるも
細 田村の御時に事にあたりて津の国の須磨といふ所にこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人につかはしける 在原行平
河 わくらはにとふ人あらは須磨の浦にもしほたれつゝわふとこたへよ

かやうのこともおはしましける　弄　此所は菅原の天神の
座なるとはかりしるへし
詠めやるとおもへはしほたれつゝかきみる
浜の上の所やうかゝるとて　宗　廊めくやうなる屋也
かゝる所にまかりぬとハ思ひしかとも　此も昔の浮人
のおもひおもひなりけり　細　罪なくして配所の月を見んとこそや
と云ことをこしにおもはゆるあはれにかんへきことにこそにれ
まろうとなとしたくさん也　弄同之
ちう紀のたかきいさきのはつきの人もなるへきことなくとなると
宗　此所の法師の修行にてとしはつるやうなる也　細　法師の志とる也
良清朝臣なとさしおもきいとかくて物かたりもなかりしをなくさめなる
宗　別して源氏に志ありける故也　弄　前播磨守なるや
時のきのふ見んためありて志あるさまを語　宗　法花あるもてまさる

さるへき所にもあらぬ也見るへし
おほかたのやうなるしも人来ることもなしとて心ほそきま也
語らひうちつくしかたに　細　東の洞の春秋の花のさかり　宗同
其のこともまてしおほえ度々うれしかりつるを思ひまゐらする
あまたひかとをとまるへくも思されとなかなかうち思
の語らひへき人しなかれハ志らぬ国のあはれさていとゝむ
ましき心ちて年月をもすくさまほしとおほしめさる
国のこと　細　摂津国なる也　宗　源氏参議たるなに法師の
ことくしとも思へくなる也とも云かくてあまりさくいれる
源はおもふとや様の人をさす也とも
宿からく事こひまつりゆくにあまの法にあつかりて京のことく
思ほしめさるにまかりきく思はく　宗　三四月はほと数へし
女君のおほしなけかしさ夜春宮の御ことなと　女君　細　紫上也

わか君の行末うちまかせまつれ給ひける事をとかくおほしなけくらし
二思ひ出て京へ入りてしたて給 わか君 栄 夕霧也
二条院へまいれ給ふと入道の宮と申すことも中り給へる
花 紫上への寄ハ物語この心は故ある人さうや紀貫之れ
返る事ハ下のよくしるべし
ふくまれ給へり宮なさも 栄 源氏よくる事被へし
松陰のあさりのかたのやまかけに [illegible]
花 ほさハ入道の事を [illegible]
とも [illegible]
細 大かたの海の [illegible]
つれつれと [illegible]
花 須海士と尼と [illegible]
栄 源氏の [illegible]

[illegible] 中 [illegible]
[illegible]
細 [illegible] 文の詞也 [illegible]
[illegible]
[illegible] の中納言 [illegible] 細 勝月 [illegible] 栄 [illegible]
[illegible] 也
[illegible] 栄 中納言への文 [illegible]
[illegible] 勝月への [illegible] 也
[illegible]
細 [illegible] 文の詞 栄 [illegible]
[illegible]
細 源の [illegible] 也
又 [illegible] 中納言 [illegible]

塩焼あまとハむしろひとりして　塩焼けむりのやく
かやうれ浦人のことゝいひてさむしとうきこりたく
人めとおもひしめもなしや　宗　源の君也わびしき里
住ひてハ同所にてかきさとの人也こゝハ塩焼もえ須磨の浦
人をいひてみるらんとも思ふ御心ハし又此宗上にはしたの
るすと云此詞こゝ思心にて清はしき也も心とおもやなる
への清く又あるにゆへりて云あはれさならぬ事はつかしき
絶奇妙也といへり此一ハ紫上の清く又あはれなと云あはれ
もとにあるとも也
河　きしに治ハ立さりてもともあるは我あまのみるめハかりんとそ云
さあくうきはかりし給ふとのよしいひやるへし大夜ほとに寧
桐のめみにもはちよまつる人ゝするとうきつるハ京
まへ比にて又有しによりひとめつゝしめんとまへ給ひて人ゝこのこおる

くもゐに二条院の君をうれましにおもひとあるめるをおもひつ
きなをなさ後にお月しとらきれハ清みつて嫁人てもとおもひしらん
とも心ありそうにおほひ給はる　おほ度も宰相の
めれとみも　細　後任のおもふや　宗　女人へ清く文あり
もてあるし給ふ清てからぬよとも思ひきあるし給ふし清
琴ぬさゝもて給へる清その白ひあるとにつきてもとま
かゝ世のあるらん人のやうにのこおもひしられも
清てうなとも　宗　清硯の数ゝそ事の御文へし
くもゐをゆくしらそて　宗　かの御文いかくしくらいしとも也
かの御文ハ僧都よ清めのあるとのみなる　宗　小山の僧都
の事也
只ひこくにてきこゆるとせきおもふもかくおもひしまきを
く清人むかしめ給て六ひあるはせてはあしせうさる給へと

細 紫上の御心をとらへさせんの事ならし又源乃後見とつゞく
るたるよし也 弄 紫上乃上と見あやうきと源の後見をと
便都移路うし也
心くるしきさまにいのりか給ふとひろとの御約るとてうして
まち給 宋 便都の心也 内大臣の給て八紫上乃御たのみ
おもふ見世とハ源氏の後見乃つすみなるへし
かゝる世の中なるとも行しぬき後ろの方たるさてもちゆうるとい
うしさに 河 無文直衣 紬をとゝのへて色をむ縄をとゝめとらむ
也綾も是も平絹の直衣也 白き袴乃かゝるも色濃き
絹也とそ 弄 平絹乃直衣也 指貫の地乃ろうも文紋を
直衣年齢よりもてる濃きも色八白也けしやき
ヽ年にようてあさきの濃深あるも一説 宋 平絹の流
直衣也云々是故也 細 平絹也今源陰名やつれてる
花 すべて無官なる人也ゆるゝ人まて後のからくたるといふ
度上人の御用也文にも見えて直衣乃時見え文
粧たるもさ見えて
たちぬうて見るとの給ふ清西うを乃帯よ身にひ給へるも
ひろし 細 前よりとして源の前なるに也
紫の人給ひしゝさ 細 流乃身にて前し給ふし清てやさとも
前さ前し給し清琴ぬきさまて給へる清そやさるし
詞よりきて見ゆる也
よるとみ給しまう給ふしらまるとを見ん給ふも 宋 御鏡台寄
りおしうて
河云脂 正紀まこうきて八うなるに桂粧をとゝのへまうあ移り見んと云さ
むしの人なるうちて物をとゝのへひめくらし 弄 此詞にさ
る也てとろを切て清て物をとゝ下へつきて見給へし

世をすてはしめつるうちにひとの人のこゝろにあはれまさりてなけれとも
ひとのこゝちもかくやうになんおもひてもおほしたてまつるらんなくなりにけれハ
あひしくおもふのひとのこゝろ給へることとなるまじきなり　細　此歌はことにまさ
世尊地をれ行ものぬ許りになむひとつも也　宗　いつれもまことに切なる人
なるひとゝなにもとのんや
さむきもしまたにもなくなりなんハいかにもあはれなくてやうくもなく
まうくさをもおもひやまもくらん　細　死別よりもまさりて世を出て行
かうさゆゑや　宗　源氏乃一句をさして云人ありてともかくもいひなし候
切にしてゆくくもをせんかたなや是ハ哀もまたあはれとなるんや
此語妙也此世よりも死にけれハともかくもいひまさるハあはけまことに
まことに福にまさけは心くるしさせんかたなく哀なることをもかなるとも
ハ此世ならぬ別の風あらくをもなれはなりけりや
こゝく涙とハなとまれと　細　此摂津国のことを離るとハつけたり

うちとくみえ福ちかくおもはれとかくのことに給ひて也
いりまゐてとうきうらあはる涙ハまつことおもひておほえにほき
やらあらん入道の宮をも源氏の涙とにかくのことおほしなけく
さ候　花　別にくハいつれもひとつむとはなれんなき給ハん世の中にもなき
いとゆくあり　宗　さしかへつしもと云詞也
涙もろくせの涙とも物思ひともなりけれハいかくあはれさまさりまさん
宗　源氏は遠行て花宮の出来給ふにも出家無常をと云んや
兼此ハさら物の哀とものうれしまましきにもこそまさる
あるへしきみさまハ遠にてつけて人のとみめかいけるこそとこ
そとのこひとへは御門しまかりいつれとも御行にけらん
しもくし　花　是まての一段ハ入道宮と源氏乃御あはれかくひ
つるかもまくひとは物のこゝろともしられてめかもしくもて
かくし給へるなるへや

もくしうおてあり紛しと 河 健ニ 宗 こゝもくちあり
こゝろきこんなし
うきうわにうれ世の人ふとうれとうるてもこゝろうつりは世ひい
つろうすあるくあ 細 源氏卷通りすとハ世にいひつくすゐ紀
やんことハ人云也 弄 人とハ源乃うす源の心ふうひと云義
ありは下詞皆源乃性の名くしきりすと衣のおほ
しめ給心也
やごめうちう里此人乃情ん心むきともあありちうすうしん心のひ
兌ふくにまあきて 弄 此ひろうる名りてやとぬうちうれ
ハあかとめろんあへし出来 細同細 ちうちのと云ふかくこゝを
こきうへしたちうよむひのくりきうのきゆへハ人の夜おもお
常をとうしとゆる紀也人乃情おもむき人とハ源也
名月をめてきくもてうくしはゆそうし也 細 源をとうく思

語しハうしてしと也 宗 人めあまう紀也
おもんれはあつうとひてお月し出さうん清乃人乃ことまとこ
夜やうみく 細 萬まの地理ろや夕やかまうえに藤壺也
源をと阿あまてに物語ともへうきと也
この詞をいとく 細 又の詞 宗 詞よう奇にいうちてみうへし
去年たるてもとやくみて松嶋の年あるあまへと物かきにとうむ
河 まし紀乃ふうえとやくと成うれ上句可勘 細 塩そやく
とあおれ役まよきうと云 花 あけまさハ塩まにうえへたり
弄 蔵松嶋のと有し清成うり歌乃詞より謂てみ給
うむう衣の清成ちは
浦まうたく海士乃ことにつくむ乘うれへくゆうちうよ紛らかそうちきれ
新 まして曉の思ひ紛らさとも紀也 海人ハ源まで比まう也
細 塩やくあまのやかくとうんとある夜すうまうれハるあまくハ塩焼

煙すこしまつ人ゝ語人ことゝ我身の上ハさらにさきの後へ
こき事ありとも知られぬよしなり 抄 此後悔の心をあらハすや云く
花 風にたくひて藻塩の煙の立のほる浦をさしていふ心さ
しられぬるこひしくもいはんかたなし心さしふかく中納言の
上の中にあるをしらせたるこひしくもいはんかたなき 細 是まて
文の詞也 宋 これとしらせたまふなり也
知らせまほしく思ふなるを 宋 中納言乃文よ源氏へ申されし
ところとや
いとしう思ひさるも 抄 中納言の君にも勝の御返事と云へし
何かれ思ひ乱れ給ふたくもあまたたちかへりあまた給ぬ
宋 源氏乃返也
姫君の返事ハ心にもとにたやすくなかりし返事ハ数あるまゝ
知られて 弄 二条院へ文の詞なるへし 細 思ひにたゆう

たえぬ返ことなれハとあるふかく源氏より文ありしにハみなさ
つとめてかれをゆくにも此物語よのもとの返へし
浦人のしほくむ袖にくらへみよ波路へたつるよるの衣を
細 紫上独語のさま也又唯ととの井 物かなしと語るを
見とて下心よはあるへし 抄 紫上此哥詠給ふ也云云
物の色し給へるほとさるといとさらにいとなり 花 二条院より
須磨へ源氏の衣裳をとして遣給へるとも物の色とハいへる也
細 よろしき衣裳をいへり
あらゆるもの給へりしを御衣をは 細 紫上とよみ給へき
人とおほしてや 宋 上﨟しき也
おほかたさ給ひて 宋 是よりも源氏乃心也
とのおもと事にふれて心くるしうゆかしうつくし故かいとゞ
夜昼おもかけにたちてあはれにおほしたるもいとしくおしい

よ夜をかけまうてにおもひて今まへうら思出し迄行人も
細 とハん路まてもすこしもしてあるへき也とや
猶思ひやむかしかなしかりまうてちかへしあまやかく
うきせは清水とかたうかんとも猶とハ 細 堂上とそ
てもむかへもやまて参る也
やうてはさうしん参かりのられたるちすひとつあらは 河霊廟
宰府[サイフ]御下向之後不断法精進にて歎文法花経を
読誦[ドクジュ]ありしと 細同
大慶のうちすゑの法まいるとあるはいともうれしかれと
細 夕霧也
とのへらあひそん 細 清水ハ夕霧へいさとや
今の生しさへく御祈へとうふあさくもおもしきをね
はしあさうともそ 細 紹 父母もしまをも八ツ歳をそへんとや

中くこれ道ハ中のとをまてゆやおもん 細 人の親のこころを
やミにあらねとも子をおもふ道にまよひぬる哉ハ兼輔
のうたとちかひとも夕霧ハそのまゝしきへくとおもへき
哉也思事の中にも丈夫の中一段大切なる事也
さうやうとうかしうきとのまうてたにまもしあるへし
細 御子地也 栄 夕霧のそハさかしまうされはまし
今日も八まつりにやと云也 光文彼岸も清也
石清水八幡宮へもはうひあり御まうて 細 六条院息所也
くれなゐとも御さきへかへまうてあさうしねさるも六路
あり かうたへ 細 まうさと作ある也
そとのそ参はひるとハへうまさにまめうしうはう
かうかんくまうて 細 法息所と復かたる也
あまうつさやハ六路へてまねはもむかとうまゐりるとも

細 汐見坂の文の詞
明ぬ夜の心まよひやせまん 宗 秋の夜ハ明まてもなかむる物なり
世ハ明ぬ夜のたはふれにひとしき程も夢の枕かな
さりとても年月へ給ひしと云事をいはんとて
細 やかてまちかき海路へさしてや
須磨の浦の三とせ文字のはなれかたきこともかへりきたれ
細 其御身のいまや花のさかりに新宮まて給はりとて申侍る
とつきまいらせしハ云ことなき中に我身の為にとおもひたりけると
あかるへし 宗 かの海京ハいつとなくかくるものなりや
うれめつ源伊勢物のあさもと云ひ申すこそ思へきて明石の浦にて
細 須磨にていさり海士とも申しけり 宗 佐見坂
よろ川にあまの海人みちて世のあはれさ海をもなかれたる
あはれときこえ 細 さまてこの詞也
いせ物語や塩干ゆくにおきりてもいつかひをえんハいつかなかうけり
新 須磨ありしをしとよめるに源氏ハ須磨の海路に給ふを
おもへしと云んあり 細 此句ハひはめて面白し源氏
かきりありて海路へし須磨ハなかしきもよしや
宗 同しこゝも塩干ゆくにおきりてもいつかひをえん須磨とや
為とは給ひしかハ帰らんにうちもときくかさ給へかしと
きこしのうち四文字はかくありとまた波のまてすこしつゝきる
と見て給ひり 宗 汐見坂の文と源氏は須磨しての心也
父をは思ひ出し人と 細 源の御事や汐見坂もかはりし事や
一かたならぬ心もさもしいかなるにこの宮をと思ひもとひ
うれしくて参給ひしとおほせらるゝにいとゝかしこきし
ちかき海をそひゆかし給ひうちれにさまにいとあはれにまて
涙とゝまりかねて 宗 萎え氏の也 宗 彼我の気のする也

二三日まへにきゝ行てうしこれ物くるゝ事とせさせをさせし
めり　宗　追風さそひしきたるなり
かゝやうにてしおはるにつゝみひたる人なりあるとかく哀なる
ほとをのゆかれハかゝれんへもとのつらし物を行かへてほの
かなるかほさ侍らうちとくるうちなけてたしと綴ねしと
アとなり　細　浮泉集の住侯や
浮泉うき行かせとのたよりひかるへし　宗　春の此也
かく覚ところへさ男と思ふ行へましくハれなるしうハき
ひとそともしあんとるそとうん浮ましくと心ほそなりしに
細　かく様は旨ハきしのゝをなうくしたるとなり待しハ無き宮へ浮
借りていらへてるへともとも言ひしひんや
愚　源氏の文詞也
伊勢人の浪うへにちくまをみとうなれ物てくあのまし物を

河　伊勢人へきおゆしき物をゆるとくへえとかひまのりて波
かゝへさて　風俗伊勢人
愚　此哥をまてて云給へるや　宗　源氏源伊勢人へまさらくし
たり行つくかうに歌ハあるまじきとも也下ときる
大方此哥はかくまへしき物とところなり
かきつらむ歌の中にもかゝれていつくもあはれなしにあらぬ事
細　我身をいかにもあさきるや　宗　同浮舟也歌よう浦
てたへ中にいふもちかきれんとも
出きさせんるもなんともちしぬこえ浦にせぬ心ち侍れな
とそ嘆けるやうはらへ三ゆこかかれにも浪のそらけし給
花ちる里をかしとおほしさるまへにいふこともしめ給へる
浦さちめんちし給　細　花ちるとの文の詞也
浩んく見給ひしにたりしこそ　宗　花散里よりの文云云

宮すて花散里へ源よりも文まゐらするよしみえたり此段
文乃給ひの源氏乃心也
めなれぬ心ちしてあはれまさりてうちなかめ給へる御思
ひのまゝにかくさまなる也　孟　趣乃文乃あるやうにてやすらく
と給ふ也
あはれなる折乃恋のやとなかめてまけりしと露のかゝる袖の御
弄　むかしのありしをとき給ふ事をあはれにむかしさまにしたしきさき古事
の御事也帝をも文あはれ也　細　此手の御袖まで花散里殿
へ御かへしとさまをもらちむかしてならぬ御かへりとて兄也下句
源く源を思ひなしたり大かたの人のかく源の御袖
の涙をそゝぐ事をもいひてなをあるへきとらも給しきに涙
孟　よそにひらくみえたるを
せわるとかいにむかしまろきもかへしろきをもちえさ段まてお

ちはかんとお聞しやりてあはれなる事はいとゞちとこそろく
つまてなるとき給へし京わたりしかもなくにお聞きつくも
してくるよそながらふく此源さりの御事ともなかさをては
うきまゝみへきさうの給へは　むかしよりまためのしろき
とちる此さ段まて　孟　此詞哥の也
うむの見はん人目しく見ゆるしうお聞しく河竹なる哉
細　朧月夜も出仕ときゝしめさもれはうしと思ひ哉
おとゝいとかなしうし給ふ見えまて　細　二条のおとゝ也朧月
夜は御とく乃御をあはれなる也
せうちは宮の御もとちかくもそこし給ふれと　孟　西殿へも法
つへも給ふの見乃あるをは法信らのあるん也　細　女御なるとよりて
うきうちある女御なとありしもおりをは
ともなきされたとてや

おほやけさまの事はうしろみとおほしおきたり　宗　それなるに
の宮つかひと源氏のおほしめしおきつれはこの御事まて
皆見出仕とりしめ給ふしと見えたり心こそ給
見る事人はたゝ人とおもひけり
まつる風てうるしゆへそれかしこき事もいそてうゆる
さま給て気り給へさまはつまてとも　細　源哉よてそとも
ひ
弘后のうちておほしうまへしてとや　宗　源氏と悪后
のかく給ふなにそて内侍のうとめしもおしきるの
出来されとの御事也内侍の心也
すと心よせにしうそはうれはおほし給ある七月のうち
てさら給ふ　細　源のすと朧月夜の心給ふ也　宗　内侍
八ゆるされく参給ふ付くても源氏の事をきゝ給ふ
給ふぬとや

いかてかとし御わすれ給ひのなくし給なれと人のみそしとも忘
るゝめされねとて　宗　御心の御心も内侍をおもひ給ふとも源氏
思ひ忘給はぬれい人のそしりをもきこしめさせ給ふとや
まいのうへをはとかくいうをも給ひてよろつの御ことを
はかまにちかうせ給　宗　内侍の御心をも心とおもひしかるへき也
源氏の御ちかちもいとあはれにいかしうよきもあれと
花
御心の御事　宗　御心のほとくらと内侍の御事なる也
なまひいつるなりの御おほゆる　細　源のうすと内侍の事ハ見給
よはるや
人のうちそうしてある也　宗　源とおほし給ひたる御中の宴
かとあるなとの内侍の心也
細
御あはひのはいかにけれ人のあはれそいとかくし心なれ
勅定也源氏の御事なとの給ひつるなり也

ゆくにまして さらに人おほけなくなりけるもえこらちを
聞けれとの給へるとて　栄　内侍をとらへて法皇の御詞也
院のおほしの給はせし詩をとらへて侍るなれ　弄　前後を考
院にて法皇の御ことしる也　細　せん宮の御心をもたへひさる也
法ともかしこまりて源くまつ給はすにた　栄　つゝしとも何事
との給へり
え給はんし給ふは　細　勝月給也　孫　勝月とも文字源氏ノ
栄　天子の源氏のみかとの給へく源氏をたのみ給へて内侍のこと
色葉く源氏と申し給へる也
世中にそあるにつきても情ちるそれ身のなりそれゆゑし
なまめくにひさしくしるなれんやとなんおしくはしもねさて
あらなんはゆくおほさるへきこ　細　法皇の御詞也　孫　源氏のす
るとの法ん給まくなしぬ色もさまるへし　栄　法皇の御詞

也なほ法皇の命とは文字まおほさまゐしもなくなんは内侍はい
かにひ給へきとや
ちかきほとの別まさにひ給ふさまはんとて給へまれ　細　源氏
なみさまとも給へきとや　栄　ちかきなとは源氏は内侍の
別給すとの給へるまとこるとは法つまなを給とももとや
とかくも内侍の給りつとなくすも給さまれとはの給かへし
いかならにとくれまいは　細　んなさくもひしとや　栄　侍かすても
ふうしんてそこなるへくれとや
拾遺
あふ事をむ侍はなみせむつきるなく風をとめてそ人はいさくもまつらむ
よろしぬ人のいひとえたむとはとなりくさをたまて心と
さるとに為と思しいらての給ふところにつきて　花　よろしぬ
人とは中なかよろしぬ人の詞まいへる事也はらの物まるまり
つく書ものとうしと給ふ也　弄　思ふなん侍へなにせんといはまくぬ

との給へるは此世にもさる人なれとや　細　つきはしたなき人なり
はしたなき人のよひよせしにも後の世をとこそ付て契へき
ものとや花紅葉にもよそへぬとは中々によしなしとかくとかや
ほ給へともおもはれいつまては　弄　源氏也　細　内侍督也
ためしやいつまてにおもふらんとの給へは　宗　院の御弟也天子
とも世にあらしるとの給ひてと明しこその御かた又源氏なるへし
と思ひて御方にと給へる給はくの給ひやかやは法もとく
ありもとはかなや　細　院の御弟也朱雀院の代にかはりて源の方あるとや
ときめきてみこたちあまたにそれてたらくしたまへ　弄　朱雀院の
御さなし　細　元も勅定也此時まてはもとよりも少御絶
生まれしと也　勝月桜の御腹にあるともたちまひとや　宗　内侍
まはなるものましまもとりし　との給ふなりや
東宮を院の此給ひなきしとなまと　細　東宮の朱雀

院の御みことも給ひて位をゆつりたまふと桐壺帝也
清きむましとや
よろしぬをとくもよそにくめれいころさるしうめると世と弘
殿の御かたに　細　此事又を清く八宮をと立給へきとや弘徽
殿の御造立也宮治に動く力もたわり私動漢高祖八男
ありし中淮南属王をとも呂后の母として参りて後に
謀反のん有し人也此八宮こそまた淮南へきさん　宗　源氏
方違の事なへし
まつりちらるし給人のあまたかれさせんかはまれにかはるれ
ほとみく　宗　延后右大臣なとの御かたの御方に世中
ともちらひ給へとも御心のはなきにありしまとなは
しまてまつる給なくて御心にあまぬとの心や
いとかしとおほしあるまてもおもかるを　宗　源氏をとさつの

おほしめしけるにおほきさとや
すまにハいとゞ心つくしの秋風に　細 秋ハことにあはれとや
宗 表裏のうつりをとくもちに悲しき文字へあはれなれハま
して秋風の吹はとの心と見るへし
海ハすこしとほけれと　細 旅にて海つらはやゝいりてあはれ
行平のすまをさすらひ山中也とあり行く海ハすこし
遠きとさへしと云也
行平の中納言の世に須磨にこもりてこゆるといひけん浦波よるよる
ハけにいとちかく聞えてまたなくあはれなる物ハかゝる所の秋
なりけりと詩にハと人もくるてうらやまとま
しまひかなしひとつめをとゞましける　花 天暦御時屏風哥
忠見 秋風の関吹こゆるたひことにこゑうちそふるすまの浦波 後拾
続古今 津の国のすまといふ所に侍りける時よみ侍りける 中納言行平

旅人の袂すゞしくなりにけり関吹こゆるすまの浦風
と此関吹こゆると云詞ハ忠見哥と行平哥とに有
つまなるを奥入及伊行釈に能宣か哥とのせられ
うたかハし此物語の詞の関吹こゆるといひけん浦波と云へ
るなれハ忠見か哥の心甚相叶へり旅人の袂すゞしく
なりにけるといふ行平の哥ハあるにより又忠見か哥と思ひ
たりて行平の哥をいひくるまやと聊推してとゞめ侍らん
やうの事ハ漢家本朝の書にいくらもあることなりやさ
らに紀氏の瑕瑾（カキン）にあらさるのみならす物語の細旅路
にゆるへし　細 花鳥にあれ忠見か秋風の関吹こゆる
たひことにと詠しけるを此浦波と云ふくめるをさと
おもひて行平とあるといふ何やまるとあるとおもふなるされ
侍る也以て今案行平ハ忠見よりハ先人なり然

又此行平卿の事より見んの事を出来ぬる也さら
此浦の人は彼行平中納言の関吹こゆると云ひけん
所の浦波と云也されはいまし行平の風土記と云てこゝに
て浦波をよむをる折情ふかくひさしく見えて侍り　栄　師説
此浦なるべし波によせて行平卿を引まし
さる事ちかくよせたる事と云り
枕をそばだてゝよものあらしを聞給ふに波たゝこゝもと
に立くる心ちして涙おつるともおほえぬに
まくらうくばかりになりにけり　栄　師説此引歌あるへし
花　遺愛寺鐘欹枕聴　白楽天
河　ひとりねの床にたまれる涙には石の枕もうきぬべらなり
花　須川にまされるやまひ風しきてとめしてなるらん
琴をすこしかきならし給へるか我ながらいとすごう聞ゆれば
ひきさし給ひて　遥聞其吟楽悲其吟懇
恋わびてなくねにまがふ浦波は思ふかたより風やふくらん
栄　源氏君也思ふかたの風吹ちかく都にちかく波のこゑかとまよふ
心なるへし　細　京極黄門の御抄にも此哥をとりてよめる
此哥をとこそへ侍るへし　孙　餘情又花乃さまにこゝろよく
波をはかね紀乃玉にこそはまねへしとあかしより風とおもふらん
うたひ給へるに人々おどろきてめでたうおぼゆるに
栄　此哥なとを詠吟し給也
忍ばれて　栄　てをと思ふべし
あいなうおきゐつゝはなをしのびやかにかみわたす　細　あちきなく
なくや
げにいかに思ふらん我身ひとつによりおやはらからかた時
たちはなれがたくほどにつけつゝ思ふらん家をわかれて

かくまとひあへるをおほさるにいとしくあ　孟　人々くハ源
氏のうけをとられしとなる也　細　源の御方経信乃人々も
君方一人の手柄にうちまけられさまあるましき物なとも
いとくちをしきなとはかなしと思ふらんとおほせされ
宗　源氏のはしくられしひ給へ人々もいよいよ物思ひし
うらんとうれあへるしさのをつくりしぬさ海すてまはる
りし給とも也
記るはさるかくれともさすかれてとうちの絵あはれしつれく
なまめいたうてかくしをつきはかしてあるひとつに給ひつし
きこえさせたる　記るしたるなとのれと　細　人々とあるくさひまむ
みえくかくれし絵也
うつ乃あやしなるとに　宗　おやさまぬ乃事
き海くれ絵ともをとうれしてさひ給へる屛風の裏てとあるを

とめてさくく見ほわり　細　此絵後に絵合に出さるゝを
人々のうらも常の人し海山乃ありさまをえるうたにおほしめすと
しとおもふかけらくてハまたにをさむするぬ様乃たくけふまのひつかす
うきはつめ給へりこれもろ乃よもきにすめる　宗　君ハ世をそむきた
まり人の山すてなるさめ給ひし所をと法作もろの清ふるよ
め国なるとに絵る海山乃有様なるとをと法彼んせさせて給ふ
きんりも法絵ふてしくまさしく絵りんと　給ふまるか
をとこれ其乃次の詞に絵乃ろすまとうあるに前屈ねぬをせ
ゆるらも也　細　君乃ゑ景色ふれにかりも法絵ふてし見まさしきを
絵りんとよしるの也
千枝はそのりるととめして　細　千枝常則皆絵師也
宗　延喜乃法代乃絵不也
はくりふつらまつしせさるやと　細　源のとも給へ法皇の御絵を

さは今別に彼絵師どもに此ゑをとらせてみせ
まほしうやとや　河海抄ニ　案　源氏ハ唐様乃墨絵をあ
らはしたる杉の絵の事に似絵をとりあつかひ
絵師ん有けるとや　似絵とハ彩色乃絵也　河海ニハ源氏
乃墨絵をおゐ人の絵師ニ彩しうさせたる河海説を
うすまでも其念をうつしたるに源氏ハ上手にておはしませハ
彩色をも心にまかせられしや只彼おゐ人のそうろうきしまして（は）
絵にさせまほしやとの心也人く乃心也
人まさりあるとあへうるまくしうめて源氏の絵さながら世の物
色ひ上まして　案　何ともいふことも人くの及ばさる絵也
ちからあれば人まねをよりまさらせたまへと四五人ある
宮ニ御かしひとあつかひ花の乃花のさかれたる花のおもし
あるさゆへる見に海ニゆるしたるにいそて給て多くすゝ絵

姫君さ母の御まし所へまゐりて人かよひとゐ
この世なれぬものと見えし給ひは　案　紫のえそ此人は河分ちか
き人はまれにしぬるものとも母君てさへよからぬるなとゝまし
きこゆるや
みるさ人やの母のくらうなるはそあへれたるにまゐりて母
ゆかれたる御にあらしなひまいらせてうちかへらえ給へる給
さ母ふく　河　白き綾乃衣ニ紫苑色の指貫也と母やうき
るなに衣とは女乃こ紀也　濃き紫の字也は紫苑色の西の方
紫裏もあるきや　花　河海ニ紫苑色のはや乃衣にハ紫
苑色乃指貫と袴ゐまてるさまもありゐへし又紫苑
色も打よし給衣乃色ともつゝむに打遠く人
うしもとさ女とハ衣をとり出て給ふと母やうくなる
はなをよし八衣の衣袴を単衣乃紫文みらくも河まて

文ハ菜花白年齢によりて用也花白ハしらきといへる色也

とこ海やられたる也と云へし　弄　花白ハ老人の事ありよ

らの同ゆゑ一説和の字也　細　文乃濃き也

釋迦牟尼佛弟子となのりてゆるゝかに読給へるも

たよにしらすきこゆ　河　南無頂礼白佛言丈室提道樹之

月氏遂隠沙羅之林慈雲尼連禅河之水文音空明跋提

之浪　本朝文粋願文ゆるゝかハ緩也のとかなる也篁

絃歌曲乃拍子みを緩急出ると付ゝ　弄　金剛佛子

集なるといふ字もとく乃心也

おきより舟とものうたひのゝしりてこき行なともきこゆ

ほのかにたゝちいさき鳥のうかへると見やらるゝも心ほそけなる

るに　河　度火之出見為浮奇

かりのつらねて鳴こゑかちの音にまかへるを

かちのをとハ鷗乃こゑ也舟をハ鷗によそへてかちの音と

かけることも詩にもありまことにみちつくしたる心也とを

雁はく鳴と云也万葉に云おきつるかもと云舟のかち

こえやうのさえたるかとゆるゝをたとへて　細　雁とハ

雁のはしを見てなくこえうちきりとたえぬのかなしさを経

て涙のこほるゝをかきはらひ給へるおてつきいとゆゝしく

まつくろなるは京乃女恋しき人々の思ひなくれたるをおもふ

花　雁橋とよひしく雁の雛をたくしろをもはやとへたらう

ちれはやまにおもるしきも　細　雁陣易遠秋風上舟飛難辨

夕陽中同上にかなへり

はつ雁ハ恋しき人のつらなれや旅のそらとふ声のかなしき

細　雁の歌乃出てきハ見ゆも我恋しく思ふ人の影也とて

又云諸人よあかしおほつかなき雁に歌なすゝ言乃出つゝまねき

さらでも有へしらるゝをさへそへたる色とききて世につらと
ましきをまよはれたまへる人々に聲をかけりしや京とへ六
京に残ちり　抄　清しとはかなたるゝ心さへ猿の京にへ残
と思ひにらるゝやうかなしきは雁をきゝてかなしきや
色を忘かいたつらの心のかたらひやとあるなり源氏の詩也
河　我為遷客汝来賓　共是蕭々旅漂身　欹枕思量
帰去日　我知何歳汝明春　関聖菅家後集
との給へるよしきこよ
かきつらねむかしの事そ思ほゆる雁はその世の友ならねとも
抄　前右近将監也雁のかきつらねたるをきゝてはいにしへの事おもひ
いてらるゝとそ
民部大輔　細　惟光也はしめて民部大輔となれり
心から常世をすてゝなく雁を雲のよそにも思ひけるかな

抄　惟光か詞　雁の鳴をきゝては常世も心也　又常世とは仙境
とかやいふ　秋　雁ちかへりて常世にかへる
雁は寒冷をさけて北へ来るもの也　春は常世へかへる
雁もきたる心ならへにかへるも雲のよそに思ひけるかなと同ハ古
へいかりのなかにも心をつきてよそにおもひける也
弄　雁の鳴をきゝては我や心か也云は雁の心也　身に
うきそつ旅にまして思ふなるに　細　我も雁の身に云也
雁もまた年月は我心あり也とよそにおもふとはわか身の
うへもおもへと也　常世国　日本紀　蓬莱山　同万
見えとまりて松浦風に乃来遊　女来常世の国乃あまま楽遊
女鴨　松浦　仙客旁
又詠浦鴨子長旁　白雲九霜にて常世
つて棚引ゆききして又詠思慮術　常世さかるかの声

てこそ思ひとゝちきえなめれとてなきをしめされ　天照
大神天照大神とをとゝち給ひし時思ひ此神を天くらくひく
とゝまらむ名をは糺乃ゐるをあつめてなる事たりしす
と讀也　見日本紀
されは右しとのことり　細うきとの陽かみを有し人也
常なくて様乃定たる處をもとつくにそ遠かはらさるを
我ハ清くるとくましるへきとの事　箋清くみなくも遠
ぬほりくきの一行のをそくれぬなとハなくさむるを也我
ハ親兄弟のこともとくまて見る清遠はなくさまつるに
とのんなるへし
家まのとりしてハつくゐ給ひまゐしとのみ　花家をうしなひぬ也
きれ祠なるへし　可考之　弄うきとのはゝなめるかと
もとをすくうしのゐハひうなんと云也　我身の家をもすと

つくあるものをとつるや　細　ひきくまてもゆくゑみや
さてのこ也　花　見も我ハさをとりしきを承る也
わやの也さもちにありてしろきしうきも清きをまてまうれ
るありあるを　弄　大としのせうわ文のくみ紀伴なる事也
細
深くまうくお陽まうる人也
下るそわきひとくあるあれと浪のうきにまてなつしはまる
きさ海のしあるくなん月いてと花やうにたゝし出るにくまさひ学
又思ありあるとお河し出て屋上の浮あるさひさひし見
わきあるをあ給ひつくんうしと云ひやう給ひつまでても　箋清使乃
人ての下れ也すハ迷惑なれともさかうみてなれなうせう
てゆくるとゆくさ海也　花　我とんとまくさむるをなるひ
さまかくと云也
はつかの月のもくる給　河　月離郷
鏡云照羅風氣如刀不

殘燈 後集 河 詩乃心ハあくまても面白くて残月在屋梁

二千里外故人の心とさしあはせつる遠人の源氏もこめられし

河 三五夜中新月色二千里外故人心此詩ハ白楽天去八

月十五夜禁中にあまして対月見元九とする四韻の一句

也と花鳥の普通にも出て此句を誦せられけるも

有ニ此段乎 細 河海抄引照 宗 京乃人をむかへて一日路

なれとも二千里乃外に思ひなしたる面白とも

へ道乃宮のさまやなにかと思ひやる心の程もしのはしからすや

思ふしらなけくれる事と思ひ出給ふ 細 柳巻にありしとや

よくも有るを遠路 花 紀角巻にも去年の春もよりとあるく

と云 細あり 宗 さらに何をそてあそひたる所也

秋の夜を侍ぬと宮の遺とといひし給ふに 弄 源氏の月

と云給とへ給ふに云へきしにあらしをと思ふの給へるとある

くさめなるゝ也 細 人にのよしと何ものまうまは物としての有さま也

名をかくさめなるゝ也

見る程に云ふ事あるにむかへあらん月乃都ハ恋る所なれは

月とみるとそ也 猿懐とかくさむるよし也 都のうちや月

乃やうなうとなるとてはなり 宗 源氏の心なる也

それ秋らしとあるに思ひ事物語とかしある夜の院

引なりけるかとしも見ひしう 宗 花とも柳巻に源氏内

へ参給時藤宮乃御返乃息流乃ゆかしけひは源給ふし

と今と出給也 細 柳巻九月とと言や藤かつると云給

しめのうちや

と思ひ出さし給て思賜乃御衣ハ今もこゝにありとしまして

いう給ぬ 細 去年今夜侍清涼秋思詩篇独断腸恩賜

御衣今在此捧持毎日拝餘香 後集 河 弄 同

宗 聖廟左遷に悪場の所良のよ述懐詩也
清らしまうしに治めるへいるもうかれしさにとぞ給へり
弄 ころ給ひり給ひともちりしや給ひり給ひしと見えさせ給ひ
細 源の法良と陽るのありへし此おも給ひの例にもあると云出し事
やうそうさる事はなる數おまさに示におり 宗 朱雀院の
法ゟ源氏に位をゆづり給ひる給ひの給ひとあるへし
清まと此物語の言ひとして我に云ひまいらせもぬるなと
もを事の派よりも出云出ありつべし
しもの心ひとへに物は相かえて心うるまま右をしもぬるく他れ
弄 右右とは一篇に思ひるまに心あをして法良をとかにてへるな
ゆうりも無てきんをもおる事とや 細 秋月の中間殿でをと
よん将ハちすにもされと又時としてハらうしめしきろうなと
ある也法くちえとハ云り 祝 按ずる君にそのて文字亭写

也 宗 源氏も左遷のことをとおもひあはせて又悪場
済良とおなじくなき事とにたり左大臣の御ゆかりかゝるとも
ろの法大弐のかゝるあるゆかりて云ひろめしもやめたち
みて不思議なるとされハ 細 五言の文也 宗 純業大宰府に下
也一度下て四年のほどに又年あまりしてあるも大弐は浦つ
たひ陸路をと云也べし
少弐ハ身をその入る浦のひまひせうとしてつくにつくに
つらと相とろうるへとこれハんとゆうたに大将殿て給ふを
もとしきもえあつるくもあるかりきそめもちハ右の
つちたへてつらうて御おそうて候 少弐ハ身を
て 細 くくとのあるとあるへし
ましてる五節のきハ清きてもくすともに打しくてり
きんの御心同につれてある国にしたるに不のさ人心の

ほどとをくねびまさりたるもあはれとみるもな
さしきわり　細　花散里巻に五節君は源氏のあひ給ひし人
なり其父の任はてゝ上洛する也　宗　是も大弐のむすめ
めども侍しかの五節との給ひしはこれ也
ゐぎぎて清せられることとしたり　弄　大弐とは帥とならぶる帥也
闕(ケツ)の時も大弐に帥をもかけたる也又常は親王不参仕
遥任(ヨウスケ)とて任国へ下らぬ事有　細　大弐はもれども帥と
いへども帥は親王の任ずる官也権帥(ゴンノソツ)といふとき
て吏務(リム)をとり沙汰(サタ)をも待り親王は吏務をもとしき
なし権帥のなき時は大弐必吏務をとり侍る也
いとといかめしくもあらまほしくやかて上洛のむかへ　細　是より過
帥は一任(ニン)の間五ヶ年也　宗　類(ルイ)ひろく上洛の体と大弐
のむすめ多くあるを(チメセン)や細也

かげに見つゝひとへ御方の出まゐるもとてこそ上るへ侍り
つま思ひのほどにかくてあはれまし思ふことなとをまた
すぐし侍るかなしきあまりうらもはかなきを侍られ　宗　上洛とはいふを
源氏へ祗候(シコウ)可仕ことの心也
あひしらひて侍る人々も聞けれは見まて　細　とくるき
なかなか中々気のうくなりくるしき也
きんのひく琴よ思ひ御あるとてふ源氏へさしてる侍りける
ともたらへてえさぬ　宗　あひまつる京の人々へ申く
まてむつひまゐらせたる程とはいふかなしくおもひまとひて
うらやましくもうけの心也
さしはへてかへり侍らんと中とも　細　ことさらにみな
気へききとや
さかへちかくて侍れのことを申まゐる　細　大弐乃子也

これらの旅人はまうしくへりとこたへしといふこともうれへ
うしやといへどもまたかなしくへくれおもふことひとしくありて
えん立ことまうし侍 細 此範蠡のことは源乃流罪と当時の会稽
人也旅人へことも源のことを行やうまでと当時の事なりかくの段
まことにかなしきあはれてかくまでしかるなり君臣の道とおもへ
又凡此巻ハ君臣朋友乃道をとらへ云あはれをせうか源
ハ謫居(タクキヨ)の身なれども惟光良清の信ありて須磨まで
と云まうすなり又三位中将ハ朋友の信ありて須磨へ
くだるなり旅されど物の哀ことをさぐるあはれかなたへ
給ふ又君臣乃道也
旅もあれば後もこまるしと人とおひかへ給
のことなるにやかくれとふやきるものゝかたへ
の旅也 細 源の詞也 宋 源氏旅にものにまかせ給ふ也

須くかたさまにおもはん 細 大かたの世へ須磨へうつりし也 宋 大かた
の世をハ此かたと略してかくるる也
うんちまりくらくてあわれの須磨さ海にかゝるにゆるさ
しあむへのへく かた 宋 旅人のかたなり
まくらしうちえみちかるを 細 枕も浮も近きと云心也
五節ハとうくして御さくるを 細 源へ書給也 宋 旅人のまな
とくかりてもと後まとのよし也
琴此御には文とめ給ふ 細 源乃和どの書をとり 宋 五節の事也 源氏乃和とれ書に行
ゆふて家まておもふやたゆる
ひさる也
こゝろしきも 細 こゝろなきまゝの人へ行しるもまてかゝるを
ゆらゝしてを須へもとこれよ也 旅 五節か事とも来かね

ゑいつのことさえよくしさをもみへつゝり
人もとゝめ給ふなとまさるもの見え侍ふ　河　心そてられ
と人なとえめそ大への海のゆくこそあさしにたかへしけるそ
いとよろしきあり　栄　源氏の須磨をもちそよろ批判の詞也
心ありそもちて縄のたゆたひうちあはれやさ波のうち波
弄　人ありいへ節いふへところ　細　人わろくもとまりたかへりしと也
栄　源氏の須磨にて心也まつかさへのまへしあはれなりていとゝさまる
かきをや
いさゝかせんとて　細　なかむらのひてやみちの判にまゆとろへて乃
こゝろあり　弄同
思ひ出しうたしくやとの給ふ　栄　ふかき心也
むまやのおさにくしいとらへもとまて給へるに　河　菅丞相
このかみに筑紫へ下給ふ時播磨のくにのむまやにて

とゝのへぬるにむまやのをさいみしくおもふへきさ
まを口号して絶句つくる　駅長莫驚時変改一栄一落是
春秋としはいへる詩也　此うたを本として口すさひの詩也
白氏文集云　因号絶句云々　遊大林寺序　ことゝへは口つくさ
ることいふこと也　白氏か紀にも口号と云て口つくるとあり
口宣なとといふも同心也　或曰句詩四韻絶句みな口すさひある
て一句の詩也　花　菅丞相は海をこえてむまやのおさ
に対しても文字にかゝはらすと絶句つくり　弄見河　一説
此物かたりにはかれ西をさしてかへる源氏の須磨
に住ひしかはかへるとそいへるまゝのかたりとなりとは
ゐるへきことにいへり志のゆくへかれは口詩をつくとへるなるへし
まうとなるへき義判也　細　菅帝の仰自河海にみてとくさ
へきを此句詩を菅廟は心もなく紀にもなき心をへしとみゆと

末代まで語り伝ふべきハましてふ節さへ猶ふ伝へられ給ふ
後代までとのこるへきことなり又の御心と此澄憲（セウケン）見ゆと
やうよう此頃ともに名残ある事に思ふ給へしつくしに留ち
とゞまりてもおもひたくことにへきとや此説可然
宋 むまやとハ駅の駅也行きとハ其駅とゆきとる人
やくしき説であれともえくはすきこし作り来と
つきたれはとてからひ作る詩のことや又別乃柳と云説あ
りとこく不（コイ）疎（ラカハス）也駅（エキ）路とハ都よりさつくして此の下向
らんと消しまくとひくあつかひて又行へとまつもや其も
てなしくにまうとてつくりしや駅（ハニ）駅ともよ（スイ）駅とも云
うま宿よ駅長のうへハ至まに地とうへるへし
ましてなをしたうらとめへくちみんおほしある能まくハ月日をも
とゞまりにけりとくしめなからて其御事あるものとおほし

ぬるを其宮ハましてなほよりおほしてかのいひくあらさ
給ふこと見えすなり給へるおめの也 拾人の物ハひたらしあるを
きるをとえさて五言ハましてなかの下に落とからまく
をおりたてことゝ也 花 萱燕桐ハ物も知しおもむきの
行さに対してこれをもつかさと作給へりけれんや五
節乃君に情ある人なれはなきにさせよとくの給ひたるを
のるかこも後まで落とまり給へくおほしは給とも
ましてかの命婦の君ハ少わりう浮き本にいでまする入道の宮を
細 王命婦也
其宮の法のたとゆかしうおほしいでたりとあかくきすしく給ひ
ふさいへしうおもほしあかりける 宋 入道の宮も様にハ源氏
と宮を通のなかすきせらるれハいかくせとはひ給ふ
給ふ大将さへつかにおはせり給へハ其宮の御位を退いまく

いつくにもいかにして心むかへ出んとおほしめしなれは心成へし
清らなる御のみさゝちもつまりし世の中のましきまなる
とこそしめはかるかとかゝる　細　源の君事也
宮を頼なるとかりきあはれなる文とはかなしうき世に
ほかそても　杉も海人の住所とよ也
世中まのとかくてとまし給へハ　宋　源氏の御とまかるとかれ
と詩文をも作かし給て遊あそひ給ふといふなる也
きさいの宮とかくめして世の人くの給ふ事あり　細　弘徽殿也
宋　悪君ハ外気色わろしとおもしろきの様なと也
おほやけのうしろみのをかしき心かはりをて　河　孝謙日本紀
勘事　勘当也　細　勘事也勅勘をいふ
このまゝもあちらへひとへにきゝ給ふてしそあんなれ
宋　あのはきかゝときもなしとのなる也

わさとしるき家ありて世をも心にまかせて　宋　源氏を
まかせての法座下との義也
この唐をとむきとひとへに人の心をめるにはへせさせる
とおしきちとも世の人なれはとかくしてこそてせらる
こ宮を頼へなし二条院乃姫君ハとかくあるまゝ氏おほえなく
さむかりなし　河　秦始皇本紀　史記曰趙高欲為乱恐群臣不聴乃先設
験持鹿献於二世曰馬也二世笑曰丞相誤耶謂鹿為馬
問左右左右或黙或言馬以阿順趙高或言鹿高因陰中
諸言鹿者以法　并見河趙高乱とわくさむとせし
と源氏の西今まてことあるそれんあるにかくへの源氏
はんをとりかへくと彼郡臣乃ときをさめてあるとつい
しれたるへてと弘徽殿の乃義也　細　趙高かる　宋　源へつと
唐のてうのまなこと人源氏を趙高まのことく人ろのことく源

民は法下ともはいせうもるとの悪名乃法ん也
和泉式部人は車ありともとゝるにうきぬとてある
唐土法にく馬とい人有それは是ともとも云事政へし
我ん此をいふ法なりし人ともみるまゝるとまいり
しもしめい　細　物語の法くみさやう聞へくや
あるといふさしもあしんとこりとみてまいりるらは
とれるうりう打りしきは法ありさ後　河　東对よ有し
人くの源乃んりを知くる人りくおれはゞ宗上のうく人
のうすとうくあるや　案　本も源氏また／＼あくぬ
人くあすれとし世上あれとて何事とこゝ也
まあやらさら流れを思ひりあくくおあれは中のそちる
ともあり　案　法説乃法くくこゝ也
さへくあくぬきとれ人くみは伊の名へしあるとも給

ろうくの中にはさくれぬる法ん法しもまとりうあり是
つと也刀んまり　細　奥入れるさ後也　案　天中かとも
上﨟あるとにハ刀んく給ふとも也
法もとまの井ふとゐさしうまのまうに　細　あさしさとい
えん給んしもそのはまうお旧し行へとかうあるとにあ
さまのしさもくせとお旧ゆるすまあゆへてくうちく
して是つきあうんさ後とこひ夜し給ひとろうり
はけりて　案　世上とよりひゝくきんうとも也
よろつ乃るすさ後うるも刀ん給へ其てぬしもも人のうへと
も刀ん給ひあくしもぬ法心ちま　案　法乃法くのますてうや
うに下々此中に交給くすあさまうしきとも也
めきまうしうかくし常ちあうしう旧さるそうり此
いとちくう時くあちくるゝとこ是やあまのまうゆくあ

らんとおほしわたるはおはしますうしろの山にしは
といふものゝふすふるなりけりめつらかにて 細 此やうの
きおりさふらひとまちかく見えまゐるにも源の
御身のかくかゝるあはれなるおほしまさる也
宗 上旬の浦わたとおもしろくきち給へも我源氏にも
乃あはれなるをたとへしなるとも
山かつの庵にたけるしはしはもことゝひこなん恋る里人
細 さひしき所なれは人もとふへきにもあらねとひとへにまちそ
むかしの都ゆかしきなり也 此 恋る里人は都の人によせし
宗 源氏の事也こひける里人は紫上也とも
冬になりて雪ふりあれたるころ空のけしきもことに
にすこくなかめ給ひてきんをひきすさひ給て
よしきよに哥うたはせ大輔よこふえふきてあそひ

給へる心とゝめてあはれなる手なと弾給へるに
大輔 細 民部大輔也惟光也
ことものゝ声ともはやめて涙をのこひあへり 細 源
乃琴の声に感したる也
むかし胡の国につかはしけん女をおほしやりてまし
ていかなりけんこの世にわか思ひきこゆる人なとをさやうにはな
ちやりたらんことなと思ふもあらんことのやうに
ゆゝしうて 細 源乃心也昭君ハ胡国へひとりつかはし也 此 京にある人
を都にて女を捨てをき給はんとの心也
く此事しき給はゝゆゝしのことをとさへおほしやる
なるへし 宗 後とつゝけたるをことに昭君のことといひ
ある面白し昭君の行ハ琵琶なれとも相にも寄り
をわけてよめり琴やうハ引相の名かれともとく 源氏

のおほしめしすてゝ人にたまはるをと昭君のやうにおもひくらへ給ふ
ことをもおもひよせ給ふとおもふはまことにかなしく此詩を源氏は
霜乃のちの夢とすんし給 細 胡角一声霜後夢
漢宮萬里月前腸 孟 王昭君を恋て朝綱か作
詩也 源も王昭君の事をいひ給ふ故に又此詩を
すし給ふ也
月いとあかうさし入て はかなき旅のおまし所おく
まてくまなし 孟 花の洞月花勝はなといふをもよせていふ也
ゆかのうへに夜ふかき空もみゆ いりかたの月かけすこ
くみゆるに 細 軒のみしかき事をいふ 故宮詩ニ絶
後床廃尤天をみるといふ心にかなふなりや
さてこれは西にゆくなりとひとりこち給ひて 河 蕙帳(?)
桂芳半且落三千世界一周天 廻玄鑒空将雲霧唯

只是西行不左遷 菅家代月答 孟 菅家為相名月之縁語
詩也 月の西へ行は左遷にあらさる也 左遷は左へうつさるれと
西へゆくといふ説あり 又説に人は一生のうちに隠るゝ物
なれは月の西へ行をおもふとの心也 弄 月の行さまを
いふ 一朝月は西へ行て東へは不行也 左遷を東にとる也
されは月は左へめくるを左遷にあらすといふと云説也
此義も面白く月の西へ行ことくこれもとかくのかるゝ
ことにやおもふらん
いつかたの雲ちに我もまよひなん月のみるらんこともはつかし
細 我も左遷したる也 孟 月は雲ちを行物なれは物也つき
我身もまよひなんといふ事や 月は我をも知物なれと我
身をもおもひしりて心のうちにもはつかしき事はしらん
てられたる事を月のみるらん 孟 源氏也 我もと云との

字不審也或本にあしくてうつくしうあはれなる人とやされとも
ある人ハうちゆうにさ海をくみひはめてとくにもあらぬなとや家
またこの人ハ月のまへよふかうあはれとさうそくして月かま
ちかぬ物あはれにてうつくしきとハいかゝなる也
むかしとおもふにうつくしきものとはかしくてこほれてそうらくに
ものうさことたのしまく
あちこちのまうけかくいかへるつきハむかしより行平の中納言のこのある
弄　須磨の事也ハ源氏也又数の人々なとなりとやとも也
細　結句おもしろくすまのすまひとハ都の人々はとこよなる時
見えてハあはれなるさまとも也
まことあはれなる人をもおもひあはれたるさまにてかく行平
朝ありくそてうつしあはれてハ行平の中納言ともあはれなりしき
すまのやうにめてたくのこるおほきに行くハ心見えてまつりまして

浪のおとハあはれにさ海をさえいつてたゝよふあり
家ハあはれなる海　細　されとハ狂作なる人をまとめなるとや
みちくの松のやとりへみるなる也
あはれなるハさらにもひとつなるはなとありなれはよしさよの
時雨の入道のむまてめくる　宗　浪をよするとハ二つとなるの命
見えけるあれハあひまちる也そへり　花　日本紀ニ八岐の
大蛇の尾をきりたまふにハ八の尾の八の谷によもひわたる尾とあり
西の二字をとりてひわたるをいふなりとむまれはものをそのひつる
あるを同事にきこへの浦ハさと海の也見るはつくしたる
よしあり
思出てくみるをもやらるれと　細　浦もさくたるまいをとのる也
まつくよりの浪也　宗　為業ハ和山つく須まの女のま
を語ることを今ニ伝りを出るとも也

女子のみをせは 細 むすめ其娘いつきて父のかゝる事を嘆
有けるにや
ち乃入道そ此女へきことあんありき海に入なんとする
也 宗 父の入道ハ宮仕にハ物うかるといたけきさまをとの返
答まてありかゝる心ゆへこそ思ひさためたる也
うきひかみもの心へゆきちかきて むすめの事をいひ思ひ
うしろてもとこちる也 細 むすめの事をいひうき
物うせはかしこくも心うかるとや
くいくてはいはせみしらは心さらにかはらぬうち
花 若殿ばら 宗 心をはまし事也
くちのゆかへは其そしてはつらとにとめれとのめる心うさ
らるゝをもさるてとし月をへけるに 細 国ハ若狭の守事
そをかふありるをは入道ためるふとあふかと思はさる也

宗 若きのちかきよりゆくとしもハ女とくはかりとあるハ入道
ゝる也 前の国守の女也ひとのめるやうをなる入道の
心とらう
此君くりつほのかうゐとさるてうちにさふらひしか
の父大納言の法らしく源氏の御くるまにてそおほやけの法らしく主
まうてくる海のうらに物し給なれ 細 入道の心よりいふ詞也
あこの御すくせにておほえぬ事のあるなりいかてかゝるつい
てに此君にたてまつらんと云 河 前の世の宿世 細 入道のむすめを
めのとすと云
母のかたるやうや京の人のかたるをきけはやむことなき御めとも
いとおほくもちたまひてそのあまり忍ひ〳〵
あるましきや 宗 母の詞也さもあれと云ん也
みかとの御めとさへあやまちたまひてかくもさはかれ給なる人

八まさにかくおもしき山ぶしとんしくめ給ぞんやといふ
河 これ也可讃嘆師說也日本紀にも妃宮をみめとよめり
白氏文集にも八十一乃御妻とあり後さきの女御更衣
御めとも申とよめりとハ御めんめ也可讃嘆也
人臣の后也
もとよりもたく 細 入道腹立もっとも也
えらひ出給ひしたてまつらんとあり 細 受領の若あるまじき也
宗 彼むすめ懐胎の時入道不思議の夢を見しゆゑに受領はわが孫は后ともなり帝王ともなりぬと思ひける
きことくに心ゑてあてたかくといふことやとはいへる
ある人をし給へはそしてもまぎらはしもまとひしまさせんと心を
かりていふことさくなくもまゐりて給ひてまでしてきつくひり
つきなり 宗 聞ことごとにてまゐるとも母はいふ也

たかきにくまでてたくさんも物のきこしめしにぞにあるま
まゐるされしよりかくいとしても思ひきん 宗 心ふ
源氏のまうしへてまつりしをもとも須磨の人はまかろし也
あやしきことてくめ給ふくはそわりてめまでされ侍りてもあるま
しきことゝあらせらひなを 宗 さるてても源氏のむすめみか
ととくめ給りんことそとも也
いとやくはかやく 細 入道也
津とにあるまじきハまさらにもて我身うとしもかくせに
くれ給ふにも人ままにとなりぬる人のうちへもあるまじ
あり 宗 後家中朝臣例多 東坡山谷楽天更而不可稱
卄又日本にも野相公左納言菅家西宮左府師内大
臣以下以外之例多之 花 伊勢物語にも家みちと云
十餘列の中にあり家国を云詞なるべし

ゆゝしう結ほゝれて　細　心すゝろなる也　源へこのむすめをとまらう
もへいさなむを底深くさるをとふらめなる也　思ひてとハ心
すゝとゆへしる也
こゝ宮を行なとのゝおもちまのへ給し　弄　桐壺更衣
の父ハ明石入道のおち也　大臣の子也　女の幸ありと
見え侍ニ　例を引
あせちの大納言のむすめにあり　細　此入道と桐壺更衣と
いとこ也
いとかうさくなる名をとりて宮仕へまいらせ給へりしに
国王すくれて時めかし給ふ事ならひ
なかりけるほとに人のそねみ重くてうせ給ひにしかと此君の御とまり給へる家
いとめてたしかく女ハ人さえ心たかくつかふへき物なりとの給ふ家
あて人なりとて思ひしもそしるを心ひかるゝを此むすめを見

もてなれ給ふくちおしうねたましうあそひものにこそをも
あるき給ふとそきゝに思へとおもひしこ人ハおもふまゝにも
なる　いとかうさくなる　宗　ちかきかたりをとりて
打つゝきそうし也　細　源のおほしめしをそしるとなり也　宗　源
氏ハ縁ある事なれハと入道のむすめ也
みのありさまとにおほしうつろひてそ　弄　明石上の也
宗　入道のむすめあるとに生れける残不足なる也
さりぬへき人さそはまほしとおもふの殺なると思召さし　宗　まう人なると
も我ハとへいまゝふと思召さしとの御心上の也
明らにつきたる世ハ流しに見へし　花　明石上之大かたハんなる
き事に本明との縁性の人なへみしきましきさとと也
今あうてよものへくまとく過ぬ尼すとなりぬ海の
そこゆと入なんなとて罪あるちくみ果るくことひうつさて

宗 父母はとくかくれ給ひしとも御名にハ六条院にて小式部に
給ひし世の常上を御なかをとハ申すなり北の方と申
年に二たびまうでて神の
御なほ(?)の事のけ給ひける 宗 去年は給ひし事也
年久しくて月日おくりて給ふにもかかるき
御のうへに思ひあめて宮の事をもかくれ給ひにし
おほしやすらはでうちちる花桜のさかり二月廿日あ
まり 細 源氏廿六歳也
いにし年宮をわかれてとらへ給ふにも花あり
さ給ふといと惑ひて南殿の桜ハ給ひしをぬさん
ひとへに花の宴あり 宗 去年二月廿日あまり宗を
御給ひ時の事也 細 去年の花宴にまゐり給ひし也
院の御事ども 宗 桐壺院の御事也

うちの人々いとさうざうしくおもひてかくゆゑまゐる句
をとこし給ひしを光源氏の御給 細 其時朱雀院春宮にて
ましましし時也 宗 源氏の御心は句をとをく給ひて御
給ひしをとて光源氏とも
いにしへとおもふ大宮人の心とて桜かざし給ひしをとお
百敷の大宮人はいとまあれや桜かざして今日も暮らしつ 赤人
哥 さくら花かざしハ花の宴あるなり 宗 惑ひてさまとも
それと桜かざし給ひしと云前て孫惑ひ給ひしとも
いと清くあるに大后の三位中将ハ今ハ宰相にて
人々のいとよろこびて時代の御ありさまも給ひし給へ
と世中何事につけてもおもひさかりのこととにて(?)く
おほえ給ふハ給ひとにさまとありて清らにあるとも(?)
ハせんとおほしてみえかくれまうでて給うちみるとも

めつらしくうまれつきたる色　人々のいとめてきれハ
宗　中将の宰相ニ任して高き位をいへり
ひとつあまりてそこら上達部なとさる絵へうさ御らんハゐ
をくれめつるを御の清き絵はうきたくしんやうあるに
細　憂喜一也　宗　宰相の心欲へし紅棗揺うまして心色
うれしと心をひとつにまて見る道ぬ物を流あり事と
竹あめるりとみやくしあいしけるし松のそらしもとめそへ
まするはかりしめつらしくにわかし山の門めきて　宗　かくめてる
るをさかしく此詩乃翻而白とや
細　五架三間新草堂石階松柱竹編墻　白楽天香爐峯下新卜山居草堂二
梅なしもとのきくちあるにあをとみひのかりきぬさしぬきう
ちやつまてちとわらに井中ひくまてあし竹つくしをいそ
しうかんるに　花ゆるしいろのうちきあをきひの梧出と

みえんとてくもゐにうきそてまいり二のおとゝ出して接り衣
裳乃名をと阿りをもゆるし色とハ落ヲをいふや表純
ハ花白まあをとき染まします色や一おりまゆるし衣のきう
ちあるもありうすき紅乃黄たるくにうきるとなし
三年清江ヲ錦被深紅衣脹奏残玄蝕浅紅蜘黄葉及ニ
夾色紅不在剖限ニ云く黄くちあるむかし八此るや河海ニ
黄衣の混文とひく重たるハあかきくりの物也又一本ニ
とおもひ乃色と云ぬけしあきことあひうちきとさるき
ぬとたくつきるちへもや人ハおなしきや　細　源の衣裳
えまれてきこうしあかりつりとも情ひ給つるてうちたもくり染め
まさるしてわかしとこころもあしてたに見られらる
宗　源氏乃さうしすまかねと見ゆく宰相の衣まいりてとや
甚もく深くうらんきの衣んみとみあかりさまさしきまして

今まての事ともかくおもひはしめ給ふありと見えさるを
河　圓碁　堯造之　双六　孟嘗君造之　弾碁　栄　今の世にみえす
きといへる説也
物さひ給ふるとたゝ渡につきけうあらてかきちらしたり
ゆゑとをあそひにてかの物まてまかうちとめし出
て海士のすみかにうへたかきとかくをいふほとに
くいまをもちいのかたへをやりて　物かいつるを
栄　源氏に限らすそこにあまへくのさ海たちへし
ゆゑともゝのあさりしてかいつもの　栄　永今はやかいつるの
とかくに貝魚なと拾ひの物とみてもへしかつかの物便
なとは貝ありと見えたり　河　伊勢図書抄云海人の
かつく物を海とあさるもと云かつく物とみえつきした
る物也或海濱物又ハ貝なとをとりたる物とする也

いそ物也　細　あまのかつきしける物也又ハ海物也
あこきうちあそ浜へはるとも又のゆくゑをたすねしこと
あそひにとを海と云ふは見ん給ひそうとともとちつきさ給
ふをと　細　あまのさへつりや　栄　海士のさへつりと云物と
いふをはさへつりといへりさえつれは海も藻も八源氏も
字相も海人もあそひゆくゑつてかけるるなりとの
心也
いかなるかひあつきとえへりぬむしそともちつきて
栄　源氏の浜そ給ふとも悦也
かりたる　孫　見渡しるとも也
くらく見ゆそたる　細　余やすとあるも也　栄　去説の何そとも
田舎のさ海也
いねとふせそつくちらとめつくしう見ん給　細　粽あるへしくさ

さ海つらとりと出るをしてみまくさにもよしなしをとゞめ
名をしらぬといふ也 注 稲とり出てかふ 藁稟なと也
あすか井すこしうたひて月ころの御物語泣みわらひみ
注 飛鳥井は催馬楽の哥也 待りるふかすなると
ふるきにうたひてみまくさにもよしやうなるひ路とうける
音妙なるへし 飛鳥井は京乃一万里小路のあたりといへり
飛鳥井にやとりはすへしやおけかけもよしみもひもさむしみまくさもよし
わか君の何ともよをおほさてものし給ふかなしさとおとゝ
のあけくれにつけておほしなけくなとかたり給ふにたへかたく
おほしたり 注 夕霧の事也 宰相のかたりなるへし
つきすへくもあらねは中々かたはしもえまねはす○まねをも
まなひもえせぬと也 文作りあかし給 新 詩を作る也 細 序
子沈也

さいひなからも物のきこえをつゝみていそき帰り給ふ
いと中々なり 注 宰相もとまりてあらまほしけれと
時のきこえをはゝかりて帰る也 宰相のきこえ
をそろしき也
ゑひのかなしひ涙そゝく春乃盃のうちともろ声にすし
給ふ御ともの人もみな涙をなかすをのかしゝはつかなる
わかれおしむへかめり うちにもかなしきものゝ
ことなるへし
一別五年方見面語到天明竟不眠生涯共寄滄波
上郷国俱抛白日辺往事渺茫都似夢旧遊零落半
帰泉酔悲涙灑春盃裏吟苦支頤暁燭前
注
白楽天の江州へ左遷せられし時三月廿日に夷陵といふ
所にてはからすも元微之に別し時作の詩の句也とそ今

三位中将は源氏の別給ひし時にもあはれなることは
うちすし給ひし也　此詩の心を
見聞
身のうへにかなへるとあひあたる様桃源そおもしろき夢の内にも
楽天詩河海に見えたり　此頃楽天か元稹に逢ふことを
心にもちてかけるも　箋　此楽天左遷の時と定の程へりお
惣る也　酔悲盃とあるに春ね衆なるたるへし
古さとをいつれの春かゆきて見んうらやましきはかへるかりかね
箋
源氏哥也　主そつれの移とまへてんこともとはいえる程に中将をさま
もしくへいまはとうつり給ひしやまのしきといへり
宰相さらに立出ん心ちせて
あかなくにかりのとこよを立わかれ花の都に道やまとはん
拾
三位中将の哥は杖のやうに見えしも此時の御されたる
とまる給へる身ぞや　細　ふとまるると思へにいかてなめ

見し都の雁とは給へし　孤上の羽すゑもさらぬあはれなるを
のかれとこそくやおもふ又あはれなるとあはれなるは
惣くつ給ふ是非老后の尾をといへり　箋　雁も都常世
とてあかぬ物かし別るゝをと我身上同前とも雁のこと
く都も宮を別るゝ花の都にみちをまとはむとも
内なへき笛の法となるをとしあはさぬてくたり何るしはさを
かくつゝしまちおれ行をくやしとて　都のつと　細　三位中
将乃こゆそも　箋　中将京の都のはとも
くろ駒奉り給
拾
くらゐにありて雲井にみちてふるさとのあはれなるかとめ給
わかるるみちの駒にあしもとはとをとをまたつまを
ゆしうおほさまは色々なれと　箋　左遷の時なりて中将は兼
らきくしるへしらぬくしきとれ源氏の志也

風はあるまてハかくへ吹きこそれハなみと中納言にあつかるを
なる浦のあつかさに出ひ給てやさしき
河 胡馬嘶北風 越鳥巣南枝 なるハまと胡国の歌也仍
北風はあふれハ旧里を忘すひてゆるも 細 胡馬嘶
北風たのと思ふなり 栄 此馬もと都の風は南てハら連
しくねちらんとも也
前の代あり節なるもちるまへとらのへさこるすハなるにそ
しるをは白やうくさしたらすくんあるもくしるれハてり
このえしつらそ給せを見んとそり給しさりと申くあり
弘 ときひはえなり給 栄 源氏と中納と節と見るを
してんのめみすけるハらし給ひぬとも
などて文字いかめん給らんとちらん 細 源の詞
たまことをかくてやる中納言にあるへし 細 三位中将詞也

雲ちかくとひかよふ雲ちにみよ為ハ表兄つきつとなたもと
細 此歌は三位中将を叱していつくも雲ちかくたかくひ給へきと
やはまいとつもる罪をあらかためとも也 栄 源氏の世をとくふ
まんるとのはへるなるの也為まえんくりつもるたとかり
外いさとのも連あらし 細 我ハ罪なきの身とさへて後へきた
ハくあしもてやてそ思へともむくしよりとも其ものとく
なるひとハまれなる也聖廟なとのことめしなとこそ
かくなりぬる人を 栄 左遷乃身との心也
昔はしらにんなにそりくしう世に又まうらるなかくは
つきたれハ行の都乃さるひとまりさ見ん也あらん行まひ給しぬ
なるとの給寄ね 弁 菅家乃るに桐壺まつ又大かさみてを
栄 菅丞相も左遷してはかなふまへのなり給了ハ源氏
と都のさりひ給ひしるなとも也

まつれき雲井にびとり独りとそなくはちさるみし色なと思て
たつかきなれ雲井をたちはなれてかへし　花　さまつる
きさまつさきれと云詞也かときさとめ書で出せり又露を
かくしてうかめるもはなさきかへしなハ源氏にさとへ給
る　細　さまつさきたれんも露にそへてまま　弄　さまつるなあ
しき色をよめる同心也　花　雲井ハ禁中也比翼連理
のちとも源氏を思つて独言とちかくことの中なるなんも
かるしもおもすくちのれさるべし侍てけとしまとくわしうさし給へ
らうなれりまおほくるまとしめやかにもあいてかくる給ぬるを
給ひとくあらうなりめくらしし給　花　源氏なきと入なれく
しらかんるすなくいちかれとの心也
とみてそいとも人ましつきかんとうあらくひてそみ子ハ思てき
左よひのはいるちにかてきたるとの日々すまんかくおほえる

五人をみるにしほへさせ也　細　上巳のはらへ也　花　上巳の
まつりへとて云也三月初の巳の日を祓とす此時ハ朔日巳に
あたれハ上巳と云てさる祓と云り今の代ハ三月三日に定て
祓をする也むかしハ巳の日の最初の事にせしなり也此日祓すれ
ハ上巳の時と也　河　漢代三月上巳日百官東流水上洗濯祓除
自魏以後用三日不用上巳　濱斎階禊に見えたり
あまさりしさかへの事也此海つらに祓ありしうて出給ひと
たるべし　花　さほとのるのハやさしきと云心なへし
せんさいちかうとりさめくらしし　弄　軟障とかく幕也
標たる物にかける絵にて壁にそへてかくる也
和　屏障の中にかける物也　細　軟障ハ障子るとかうれ
物也絹みてせんさいやうとうちるなあり云々せ書や
うみとよむへし

此くにゝかよひけるおんやうしめしてはらへさせ給舟に
ことごとしき　河 道満法師居住播磨国云々此事也
細 むかしは国々に陰陽師医師をおかれし也河海に云
法師乃すかたにて事の儀式に及ぶも也
人かたのせてなかすを見給ふにも　宋 源氏の流さるゝ事を思て
よそへ給ふ也
よそへられて　宋 人形を御身になぞらへて源氏の流人によそへて此
てあり
しらざりしおほうみのはらに流れきてひとかたにやは物はかなしき
細 人かたの事ありし八ひと人形のまいとくとも也　宋 源氏の事也一かたに
やはもの思ふ歌也　一かたならぬ悲しさ計まていまして家のさ由あ
くは悲しさとも人形をとりたり
とてゐ給へる御さまさる晴に出ていふよしなく見え給ふ

細 いふよしなくとは云ふもおろかなる源の御ありさまを也
海のおもてうらうらとなぎわたりて行末もしらぬにきしかた
ゆくさきおぼしつゞけられて　宋 三月一日御祓面白し
やほよろつ神もあはれと思ふらんおかせる罪のそれとなけれは　六
花 中宮範政乃流されし人は大伴皇子の哥
細 後より罪なくて流さるゝ人は罪なくしてあやまちもなき事を也
何かは何事もなく罪ありし人ひとへにあやまちなき也　宋 無罪后宮の流代
と源氏の心中をはかり給ひし給を聞　音無瀬あらはれ流るゝ此
此人は代々なしに思ひ合せにあまりなるれ八百万神もと源氏
をはしまされの給へどもの心に源氏也やまと紀にも
百万神也
との給ふにはかに風ふきて空もかきくれぬ御はらへもしはてずたちさはく
ひぢかさあめとかふりきていとあはたゝしけれは　細 ひぢかさ雨俄の風雨

乃変とあるへきにや源の罪なきによりて天瑞
娘有りとも此哥に感じて微なる風雨なく静まれ晴
て光彦に源とめくらへさるへきや聞云此の瑞言とみゆ
める也　私云　哥をよみて神の御やうて風雨乃天すよりなき
ちくとも人をかんして天地をうごかし云ふん
紀ちうさ雨とらぬまきて何もなきしられもみなちんの絵
葉とよらるにとよさもともあるに　河いともふゆへきとらぬ
川ひちらさ此雨もあるてらんさら屋とらやん苦とと
里体つにして神をうごかしまるるよしや住吉紀有
大雨をひちづきめ或は紀ち雨とふる也と聞紀也
ある心をもあそれよ　栄善あるとの国ととも紀よとのん也
よろつ時ちりに又あり紀風なり波いともめしくたちさて
人くのあひと雲あり　栄そとうひあり紀大風也

海の面ハ常ひまよとらんやうに見えみちくる神なるを
紀うめく打ちうる心のちりてうらうして　細 波の白さ也とよ也
花 道成集安院の詩に永くて雪気ひろうあるりて行しに見
とよう見へく也はれ年まと　年まとに冬えるちと
つよめうらてかへくてきこかもち海雪の所
定家卿明月記云雨脚(ウキヤク)甑地(ニウニチ)電光(テンクワウ)張(ハル)衾(フスマ)　栄 海上の白拍也
そとうさくて承めハみもとも何もれ風あとか
細 やとへとうかと来ることや
もしきつきてあれ源ものうありてよりまとみ
よ行やまたゆりみちて雨乃何あるかそとよ
らめも恐りかく雨世をはさぬるにやとき閉くく
かに　細 よのつひ乃風ハ薫つくすにありて吹るもの
微妙大風也

是ハのとやうは経うちきんしておもうは蕃女の造りし袮宜とくし
ありやうて風ろうふうも色吹 栞 源の性とも奇物なりめてきち
よ松下根乃様をとりんをたり
おほくさまてつる袮乃ちうつるも人へしてき方りかくうたあり
おしきも波は泌まちてへぬ人りまも有り 細 此風景新をとた
てえちはあらへし
らもうちやとい袮はおんところを的へ人ありてありうるをぬハきさ
をといやうは風まりのをかまてえてはと心ひはへり暁うさ皆
うちゆきとたり是と心ちて霞入錦へ達付
是まてと読 大伴黒主は汀波風吹うくえる塩といふ袮へていと
打そろうてやとも皆ちられて志ん底も心ゆるりいきえ
あうひ君ら人くえをみるあるまち有り 栞 私羅波
乃ちらみる乃るのをいへり

これは海とも見えぬ人さて 栞 源氏乃夏中におそろし
きありたる物事ともるとめしありは来乃給をぬそ
せやや
あと宮うちめしあるは入ちく来乃給の名とて 細 給を女さるまへ
事あり
名ふまありくせみるは常とろさて 栞 ちひおりくさ風也
さハ海の中は龍王乃心とつくり物めてさる物のうく見へつま
あるありや哥はまにいとも心うし 栞 さらしれて
いも彦火々出見尊釣ちるとも失給うく渡るもよ到り
て龍宮ありは龍神顔容貌絶世ちるまとさるふめて
まりてむもめれ豊玉姫に合せんとて龍神志か
清くの前と祝しく玉針をもて来くせんとて龍宮
へるとつまやて三とせとくめまてさるへり給時せし聞

干珠満珠の二つを奉りし豊玉姫は神武天皇の母に
てましませり又彦火々出見尊を去りて源
氏の系譜にいふ云々鵜葺草の豊玉姫をはなれまし
しを明石の入道のむすめにかよはしめ給ふ事を納めり
云々　河又日本武尊東夷を征し給ふ時相模より上
総国にうつり給ひしに鵜葺草めでたるを取ませ
叢とし又入れて渡海ありて浮ぬとも見ゆせし
に弟橘姫のあまの下命にかへりみたまへ給ひて失なはせ給ひ
たる橘姫をしのび給ひて上野国碓坂又曰日(ウスイ)あつまはやと
てあつまやと宣ひしかば東(アヅマ)をあづまといふ也　歌書
と云ふ也　吾嬬と書てあつまとよむ也　東は家字也
并
彦火々出見尊の其所を知る海のほとりに塩土老翁(シホツツノヲヂ)とあり
て鹽土とし追て参りし給ひし塩土老翁とやうる事

のき海くれ此鄉そして彦火々出見尊を海中に入まして
豊玉姫にあひまして後に干珠満珠を得て帰り給
ふのありけるを思ひ給へしなるべし　細　花鳥餘情にも
あり
この海の名を入らるゝ事御はりぬ　細　明石のうらひ書記
もへき發端なるべし